
どうやら東方に・・・あれ？

いろはカルタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうやら東方に・・・あれ？

【Nコード】

N1046V

【作者名】

いろはカルタ

【あらすじ】

トラツクに轢かれて死んだら赤ちゃんになっちゃった！？……しかもぱちゅりーに転生ってどのテンプレ転生よ。まあいいわ、私も原作みたいにレミリア達と会って親友になってやるんだから！……あれ？なんでこの子いるの？……え？ネギま？ 注意 この物語は読み専だったヘタレな作者が書いたものです。過度な期待はしないで下さい。また転生、原作ブレイク等が含まれております、そういった物が苦手な方は出来る限り見ないことをオススメします。

7/30 1話改訂に伴いあらすじ変更しました。

表紙 「更新状況（2011/10/10 更新）」（前書き）

始めまして、いろはカルタと申します。

何分、こういったものは初めてですのでお目汚しな部分が多々あるかと思いますが、出来る限り読みやすくしていくつもりですのでよろしくお願い致します。

とりあえず更新状況です。

表紙 「更新状況（2011/10/10 更新）」

まず初めに

このページをご覧頂き、ありがとうございます。

「どうやら東方に・・・あれ？」は、

読み専だった作者が書き始めたネギま×東方クロス物です。

色々未熟な部分があるかと思いますが、生暖かい目で見守ってくださると嬉しいです。

また、この小説はご都合主義、転生等、人によっては見たくないという内容も含まれております。

それでも読むと言う猛者は先へお進み下さい。

以下、更新状況

2011/07/22、1、2、3話目投稿

2011/07/23、4、5話目投稿

2011/07/25、6話目投稿

2011/07/26、一時更新停止、1話目改訂決定

2011/07/29、3話目を修正、1話目改訂に伴い2話目以降も改訂決定

2 0 1 1 / 0 7 / 3 0、	1 話目を改訂版へ差替え、それに伴いあら
すじとタグを若干変更	
2 0 1 1 / 0 7 / 3 1、	2 話目を改訂版へ差替え。
2 0 1 1 / 0 8 / 0 1、	3 話目を改訂版へ差替え。
2 0 1 1 / 0 8 / 0 2、	改訂に伴い、4、5、6 話目を一旦削除。
2 0 1 1 / 0 8 / 0 6、	4 話目を投稿。
2 0 1 1 / 0 8 / 1 2、	3 話目を修正。
2 0 1 1 / 0 8 / 1 3、	5 話目を投稿。
2 0 1 1 / 0 8 / 1 9、	6 話目を投稿。
2 0 1 1 / 0 8 / 2 4、	7 話目を投稿。
2 0 1 1 / 0 8 / 3 1、	8 話目を投稿。
2 0 1 1 / 0 9 / 0 3、	9 話目を投稿。
2 0 1 1 / 0 9 / 1 4、	栞 1 枚目（閑話）を投稿。
2 0 1 1 / 1 0 / 1 0、	1 0 話目を投稿。

1 ページ目 「魔法使い、生まれました」(前書き)

1 話目、改訂しました。

改訂前からの変更点。

- ・TS要素を消しました。
- ・神様にもらったチート消しました。

付与能力なし、素のぱっちえさんをお楽しみ下さい。

1 ページ目 「魔法使い、生まれました」

1 ページ目 「魔法^{わたし}使い、生まれました」

転生って言葉知ってる？

意味は死んだあと別の存在として生まれ変わる事よ。

何故こんな事を説明しているかというところ……。

トラックに轢かれて気がついたら赤ちゃんになってたからよ。

目が覚めた時は本当に混乱したわ……。

身体が自由に動かないし、周りの物が大きく見えるんですもの。

それにしても、また赤ちゃんをやるとは思わなかったわよ。

しかも前世の記憶も引き継いでの転生だなんて……。

今の状況はまるで——そう、まるで趣味で見てた二次小説のようだわ。

これでマンガとかアニメの世界だったらどこのテンプレ転生よって話よね。

「あら起きたのね、パチユリー」

……今何か聞こえなかった？

き、気のせいよね……ええ、きっと気のせいだわ。

なんて思っていると紫色の髪的女性がぬつと私の顔を覗き込んだ。
た。

ッ!?

び、びつくりした……。

きゅ、急に、出て……こない……でよ。

あ、ダ、ダメ……。

「ふえ……ふえええん」

——ただビックリしただけだった。
それなのに身体が勝手に反応して、我慢できずに泣いてしまった。

「あらあら、ごめんねパチュリー、ビックリしちゃった?」

泣き始めた私を女性は抱っこしてあやし始める。

「ふえええん」

「よーしよし、大丈夫よー、何も怖くないからねー」

女性は身体を揺らしながら私をあやす。

その揺れが何故だか心地よく感じ、次第に私は眠りへと落ちていった。

「……Z Z Z」

「ふふ、寝ちゃったわ」

おはようございます……。

夢落ちならどれだけよかったか。

赤ちゃんになったとはいえ、中身二十後半の私がいきなり泣くとは思わなかった。

そういえば、最後に泣いたのはいつだったかしら。

——って、今はそんな事はどうでもいいのよ。

目を覚まして早々だけど、私は危機的状況に陥っている。

「おはよう、パチュリー。まずはおしめ換えましょうねー」

なんていうか……もう諦めるしかないのかしら？
えーっと、こういう時はアレよね、現実逃避でもすればいいのかしらね。

それじゃあ……私の名前の事なんだけど、『パチュリー・ノーレッジ』で間違いないみたいよ。
生まれ変わったら東方の世界ってどこのテンプレ転生よ。
それよりも、パチュリーに転生って事は私、喘息確定よね？
鬱だわ……。

あ、そういえばパチュリーと言えば、レミリアが親友だったわよね。
私も友達になつてみたいわね、そのうち会えるのかしら？
喘息は残念だけど他の東方キャラに会えるかもしれないと思うと楽しみね。

ふふ、早く会えないかしら。

……ところで、昨日はビックリしてよく見てなかったのだけど今おしめを換えている女性。
多分私のお母さんで間違いないと思うのだけど、見た目パチュリーにそっくりなのよね。
髪型は、後ろはそのまま流し、両サイドの髪はリボンで束ねて両肩から前に垂らしている。
服装はゆつたりとした黒色のローブに黒色の帽子、そして帽子には黄色い星の飾りが着いている。

……どこの２Ｐカラーよ。

とりあえず身に着けてる物こそ違っけど髪型といい顔といい本当にそっくりだわ。

違いがあるとすれば目元に泣きボクロがあるくらいかしら？

——ぶるるっ

うう……お、おまたがスースーする……早くおしめ着けて……。

「はい、パチュリー。終わったわよー」

私の願いが届いたのかすぐにおしめは取り替えられ私の平穏が戻ってきた。

ふう……やっとおわっ「次はお乳飲みましょうねー」た……。

お母さんはそう言うと言えぬ胸を私の顔の前へ持ってくる。
私がいつまでもそれを口に含まないのも無理やり口に含まされた。

……ちゅーちゅー。

か、体が勝手に反応して吸ってるのよ、わ、私の意志じゃないわよ。

——吸い続けること数分。

げぶ……ごちそうさまでした。

……早く離乳食が食べたい。

その後も自由に動かない体で、羞恥プレイに耐える生活が続いたわ。

……ちょっと、何卑猥な事想像してるのよ、まったく。

とりあえず、そんな生活が5ヶ月ほど続いてやっと離乳食が食べれるようになったの。

「パチュリー、ご飯ですよー」

そう言ってお母さんはスプーンを差し出してくる。

あむっもぐもぐ……。

でも余り美味しくないのよね……。
今はパンをミルクで煮詰めてドロドロにした物を食べてるわ。

なんというか……お米食べたい。

あむつもぐもぐ……。

そういえば先日、やっとお母さんの名前が判明したの。
名前はメリッサ・ノーレッジというらしい。

パチュリーに、メリッサ……。
きっと親戚にマジヨラムとかローズマリー、ヒソップとか居るに違いないわ。

あむつもぐもぐ……げぶっ
もうお腹一杯だわ……ごちそうさま。

5ヶ月が過ぎ、私もそこそ大きく変わったからなのかお母さんが目を離す事が多くなった。

それを機に、一度ハイハイしてみようとチャレンジしたのだけど――
――。

ちょっと進んだだけで体力が無くなってダウンしたわ。
そこをお母さんに発見されて大騒ぎになったけど……。

それ以降、またダウンして大騒ぎになっても困るので、運動は辞めて喋る練習に切り替えた。

と、言ってもお母さんの言ったことをまねて喋るだけで、まだあうしか言えないのよね。

そんな事を繰り返しつつ、季節は巡り――。

「ぱちゅりーのーれっじ、さんさい」

「あら、パチュリー偉いわねー、誰に自己紹介したのかな？」

「いわないといけないきがした」

「あら、そうなの？」

改めまして、パチュリーよ。

……喋れるのだけどまだ舌が思うように回らないの。

ちなみに書く方はまだ微妙だけど読みだけはなんとかできるように
なったわ。

日本語じゃないので最初は戸惑ったのだけど流石は子供ね。
スポンジの如く知識を吸収してあつという間に憶えたわよ。

あと運動の方だけど……絶望的ね。

まだ喘息の症状は出てないのだけどすぐに息切れして体力が続かない。

喘息の症状が無い時点でこれだと喘息がでたらどうなるのかしら。

……これ本気で危ないかもしれないわね。

ところで、今何年かわからないのだけど喘息の薬ってあるのかしら？
無かったら無かったで困るのだけど、流石にあるわよね。

……無かったら本当にどうしようかしら。

1 ページ目 「魔法使い、生まれました」(後書き)

ここまでお読みいただきありがとうございます。御座います。

2011/07/30 改訂

なんとか改訂投稿できました。

正直、おしめやら授乳やら育てた事ないので適当です。

普通は子供が泣いたら取替えたり、授乳したりだと思いますが都合主義ってことでしょうか orz

色々拘ると更新が遅くなりそうなので……。

改訂前を読みたい場合は活動報告内に置いておきますのでそちらをご覧ください。

2ページ目 「魔法使い、本を見つける」(前書き)

2話目、改訂しました。

改訂前からの変更点。

- ・ 神チートを消したので魔法練習を若干描写。
- ・ 某ヤマジユン本を削除。
- ・ 終り方を変更。

終わり方を変えたのに伴い、3話目冒頭に繋がらなくなりました。
ですので3話目を改訂するまでおかしな事になるのでご注意下さい。

2ページ目 「魔法使い、本を見つける」

2ページ目「魔法使い、本を見つける」

こんにちは、パチユリーよ。

あれから更に季節が巡って5歳になったわ。

読み書きも完璧になったから本で調べただけど喘息の薬は一応あるみたい。

ただ、吸入薬ではなく普通の飲み薬みたいよ、本当に薬があって一安心だわ。

「パチユリー、また呪文を間違ってるわよ」

「え……あ、本当ですね」

現在、私はお母さんと一緒に魔法の練習をしているのだけど、詠唱の暗記が思ったよりも難しい。

魔法の発動自体は魔力を意識しながら呪文を唱えれば大体成功しているわ。

集中が乱れたりすると魔法の制御が出来ずに魔法が消えちゃうけど。

それと、本来なら4歳で魔法学校へ入学するらしいのだけどお母さんが、

「ノーレツジ家は他とは違った魔法を使うから学校なんて行かなくていいわ。その代わりお母さんが教えてあげる」

と、言うので学校には行っていない。

聞けばお母さんも学校には行っていないらしく、やはりお祖母さんから教えてもらったと言う。

ノーレツジ家の魔法は他とは違うという事なので詳しく教えてもらった。

五行の木火土金水の属性に日と月の属性を足した『七曜の魔法』がノーレツジ家の魔法になるらしい。

また、ノーレツジ家の魔法とは違い、西洋魔術、東洋呪術とい物があるとか。

お母さんに違いを聞いたのだが詳しくは分からないらしく次のような事を言われた。

「んー、西洋魔術は魔法を使うのに始動キーっていうのを使うらしいわよ。東洋呪術についてはさっぱりね」

『始動キー』ってどこかで聞いた事あるのよね……どこだったかしら。

まあいいわ。

それで、ノーレツジ家は火や水といった単属性だけでなく木火、金水などの親属性——相性の良い属性を掛け合わせた魔法を使う。

ここまでは普通の魔法使いと同じなのだが、反属性と呼ばれるお互いが反発しあう属性も掛け合わせて使うのがノーレッジ家なのだろうか。

話を聞いていて一番驚いたのが、元を辿ればノーレッジ家の魔法も西洋魔術も同じ魔法体系だということだ。

その始まりは、一人の魔法使いにあるという。

この魔法使いの使える属性が光と闇の2種類のみだった為、属性の掛け合わせが行えず落ちこぼれと呼ばれていたのだとか。

それが悔しくて必死になつて克服し、使いこなしていった結果がノーレッジ家の始まりだという。

ちなみに反属性の掛け合わせを研究する途中で、今の五行を元にした七つの属性に至ったらしい。

……ノーレッジ家って結構凄いのね。

ちなみにその始まりの魔法使いの絵が家にあったので見せてもらったんだけど……この人もパチュリーの容姿と瓜二つだった。

お母さんといいこの人といい、うちの家系の女性はみな似た容姿になるのかしら？

そんなノーレッジ家の魔法の中で最も難易度が高いのが『賢者の石』と呼ばれる秘術である。

この魔法は木火土金水の五行全ての属性をバランスよく掛け合わせて発動させるため、簡単には使いこなせないらしい。

お母さんはこの魔法を修得するのに数年かかったという。

私はというと、ここ数日で単属性の魔法、親属性を掛け合わせた魔法の二種類はなんとか使えるようになった。

もちろん単属性の魔法は使えるので日属性のロイヤルフレアとか月属性のサイレントセレナは使えるわ。

ただ、五行よりも上位の属性なのでかなり集中しないとまだ失敗するけど。

反属性の掛け合わせはもう少し練習しないと無理ね。

初めて試した時は焦ったわ……制御を誤ったら反発しあって爆発するのよ？

で、魔法を教えてもらってるのだけど順調に行き過ぎてかなり驚かれています。

普通、この歳では単属性、それも五行のみを扱うのがやっとなんだとか。

なんていうか流石はパチュリーといった所かしら？
身体のスベックに助けられてるわね。

そういえば、魔法を教わるの時、お母さんから原作で身に着けていた紫のローブと帽子、髪を結ぶ為の青と赤のリボンをもらったわ。
まだ髪は短いけど原作と同じ髪型にしてるからこのローブを着ると本当にパチュリーになったんだなって思う。

てかお母さんと並ぶとそっくり過ぎて怖い。

親子だと言ってもここまで似なくていいと思うの。

——ひたすら魔法の練習を繰り返す事、数ヶ月。

遂に反属性の掛け合わせも使いこなせるようになったわ。実際に使っているとところをお母さんに見てもらったらかなり驚いていた。

聞いた所、反属性の掛け合わせは普通10歳かそこらでやっと思える様になるのとか。

パチュリーは天才よ！　なんて大喜びされてしまった。

とりあえず、次はいよいよ賢者の石ね。
直に使いこなして見せるわ！

反属性も使いこなせるようになってから数日。

お母さんから『捨食の魔法』なるものを教えてもらった。
この魔法を使えば食事を取らなくてもよくなるのとか。
なんて凄い魔法なのだろうか。

前世でダイエットとかしてた自分がバカらしくなってくる。

それともう一つ、『捨虫の魔法』というのもあるらしい。

これは歳を取らなくなるという夢のような魔法なのだが、もう少し身体が成長するまで教えないとお母さんに言われた。

……別に教えてもらってもまだ使う気はないのだけど。

ちなみに、この二つの魔法もノーレツジ家の秘術だとか。
この二つと、賢者の石をマスターして初めて一人前の魔法使いとして認められるらしい。

——更に数日。

とりあえず捨食の魔法が本当にやばいのよ。

これを使ってから本当にお腹が空かなくなった。

お腹が空いたから今日はここまで、なんて事がなくなったせいで気づいたら一日経ってたわ。

と、捨食の魔法が本当に凄いのは置いておくとして。
残念なお知らせがあるわ。

——遂に喘息が発症してしまったの。

「けほっけほっ、けほっけほっ……」

「パチュリー大丈夫？」

「だい、けほっけほっ、じょうぶ……けほっけほっ」

お母さんが気遣ってくれるが正直言って苦しい……レミリア達に逢う前に死ぬかも……。

薬を服用するも中々効果が出ない。

これ原作のパチュリーはどうやって乗り切ってたのよ……。

「けほっけほっ……はあはあ……けほっけほっ」

また、喘息は魔法にも影響を出しており、思うように詠唱できず魔法を唱えきれない事が多くなった。

日常の方では激しい運動をしたり、ほこりっぱい場所に長時間留まったりしない限りそこまでひどくは無い。
ただ、急に激しい喘息発作が起きることがあり、体調が悪い日などが重なりと一日中寝たきりなんてことも。

こうして喘息と付き合う生活を続けて数年、書庫で一冊の本を見つけた。

本のタイトルは『楽しい異世界旅行』

こんな本、書庫にあったらどうか？

そう思いながら本を手にとった時、本の著者が目に入った。

「ど、どういふことなの……」

その名前……本の著者の名前は――。

『K・Z・シュバインオーグ』

なぜこの人の名前がここで出てくるのか。
もしかしたらここは東方の世界じゃない？

いや、まだ幻想郷の有無を確認してないから断定はできないわ。
外の世界ですもの、もしかしたら外の世界は型月の世界という可能性もある。

それに偶々同姓同名って事もありえるわ。

そんな事を思いつつも本を開き読み進めていく。
ペラ、ペラと本を捲る音のみが辺りに響く。

それから数時間、本を読み終えた私はボタンと本を閉じた。

「宝石剣について何も書いてなかったし、同姓同名の——平行世界の宝石翁って所かしら？」

で、本の内容だけど簡単に言えば空間に穴を開けて好きな場所に行けると書いてあった。

異世界や平行世界等も理論上は可能らしい。

異世界とか平行世界は兎も角、好きな場所にいけるのはとても便利である。

「レミリアに会いに行くのに良さそうね」

これでレミリアの目の前に急に出て行ってインパクトある登場とか良さそう。

でもなぜかしら……。

出て行った瞬間喘息の発作で苦しんでる自分が居るような気がするわね。

2ページ目 「魔法使い、本を見つける」(後書き)

ここまでお読みいただきありがとうございます。御座います。

2011/07/31改訂

喘息の表現が難しい……読んでたら咳喘息にしかみえん。
ひゅーひゅーやらぜーぜーやらそれっぽいを入れるべきなのだろうか。

ちなみに作者は動物アレルギーで喘息は経験済みです。

マジでアレルギーやばいよ。

くしゃみ・鼻水・喘息のコンボ来た時は素で危なかった。

咳でて息苦しい上にくしゃみとか止まらないんですよ。

呼吸困難一歩手前で素で死を覚悟したくらいです。

あと改訂前を読みたい場合は活動報告内に置いておきますのでそちらをご覧ください。

余談ですが実家に犬が3匹居ます……なので実家に帰れません。

3 ページ目 「魔法使い、不貞寝する」(前書き)

3 話目、改訂しました。

改訂前からの変更点。

- ・ 2 話目改訂に伴い出だしを変更。
- ・ 魔法詠唱の呪文を消去。
- ・ 捨虫の魔法修得の年齢を変更。
- ・ 終り方を変更。

次話、改訂前とは違う話になる予定

3 ページ目 「魔法使い、不貞寝する」

3 ページ目「魔法使い、不貞寝する」

さて、レミリアの前に急に現れて驚かせようと思いついて早3年。宝石翁と同名同名ばい人の本に書いてある魔法を再現する為、頑張ってみた。

そして頑張った結果だけど……。

まだ実験はしていないけどいけそうな気がするという段階まで来れたわ。

というか喘息の調子がよくないと詠唱が出来ないので実験できなかったの。

まあそれも今日で終わりだけだね。

ふふふ、遂に実験が出来るくらい調子がいい日が来たわ！

調子が悪くならないうちに実験するわよ！

まず床に魔法陣を書く。

この魔法陣には空間に穴を開ける為の術式を書き込む。

その為、ここを間違えてしまうと大変なことになるはず……多分。

最悪、空間湾曲とかするかもしれないわね。

……あれ、もしかしてこれ失敗したら本気でやばい？
気がつけば冷や汗がだらだらと流れている。

「か、確認作業を何度もやれば大丈夫よね……」

その後、何度も魔法陣の確認作業を行う。

何回確認したかは覚えてないけど少なくとも十回はしてたと思う。

確認作業を終え、魔法陣の前に立って本を開く。

そして呪文を唱えると魔法陣からまばゆい光が辺り一面に広がり身体から魔力が抜けていく。

私は魔法の制御をしながら繋げる空間の場所をイメージする。

——レミリアの居る場所レミリアの居る場所レミリアの居る場所。

そして光が収まると——。

何も変化はなかった。

「…………失敗？」

念の為、辺りを確認するが何もない。

「魔力は減ってるから発動はしてるはずなんだけど…………おかしいわね」

魔力は減るが何も起きない事を不思議に思いながらも二回繰り返したのだが結果は同じ。

魔力も少なくなってきたので実験を終了し自室へと戻ると、直に異変に気がついた。

「イスと本が数冊無くなってる…………って何これ!？」

部屋へ入るといつも使ってるイス、そして本棚の本が数冊消えていた。

そして一番の驚きはナイフが一本天井に突き刺さっている事だろうか。

私は部屋を出て、お母さんの部屋へと向う。

ナイフを持って行こうかと思ったが天井に手が届かなかったので諦めた。

「お母さん、私のイスと本しらない？ あと天井のナイフ」

そっぴいなからノツクもなしに部屋へと入る。

部屋へ入ると、お母さんは本を読んでいたのか本から視線を外しこちらを見る。

「イスと本？ 貴女の部屋に在ったものよね？ それにナイフ？」

「ええ、部屋に戻ったらなくなつたの。あと天井にナイフ」

「私は知らないわよ、今日はまだ部屋から出てないもの」

お母さんはそう言つて興味がなひのか読んでいた本に視線を戻した。余り読書の邪魔をすると機嫌が悪くなるので諦めて私は部屋を出る。

「おかしいわね、この家つて私とお母さんの二人しかいないのだけど……」

泥棒でも入つたのかしら？

一瞬、黒白魔法使いの顔が思い浮かんだが、多分違ふだらう。彼女はまだ生まれてないはずだしナイフなんて使わない。

結局どこへ消えたのか分からず新しいイスを用意することになった。無くなつた本は既に絶版で手に入れるにしてもお金がかかるので諦

める事に。
そしてナイフなのだが、結局手が届かないので未だに刺さったままである。

……犯人を見つけたらロイヤルフレアで焼き尽くしてあげるわ。

それから何度か季節が巡り――。

「そろそろ捨虫の魔法を教えるわね」

突然お母さんが部屋にやってきたと思ったら第一声がこれである。

「えーっと、突然ですね……」

私の年齢は現在14歳と数ヶ月。
お母さんの中ではこの歳なら使っても問題ないと思っているの
でしょうか。

14歳といえば、前世を思い出すわね。
当時私は中学二年生で、同じ部活の先輩に一目惚れしていたの。
先輩が卒業する時に告白しようと思ったのだけど、いざ言おうとし

たら何も言えなくて。

で、友達の後押しもあってなんとか勇気を振り絞って告白したのだけれど……。

その時の返事が確か――。

「ごめん。俺、胸の小さい子はちょっと……」

だったかな？

そこからの記憶は曖昧だけど、気づいたら自分の家の部屋で一人泣いていたのは覚えている。

後で聞いた話なのだが――。

私が泣きながら走り去っていった後、友達の一人がその先輩を殴ったらしい。

翌日、仇は取ったと言って私を慰めてくれたその友達は今も元気に暮らしてるのだろうか。

思い出したらちょっと泣きたくなってきた……。

「パチュリーどうしたの？ 泣きそうな顔して」

「いえ、ちょっと昔を思い出してました。あとお母さんが私の部屋に入るのは久しぶりだなと」

「私がここに入ったのは確か夜中に目が覚めて一人でトイレに行けずおね「わー！ わー！」した4歳の時以来だったわね……あの後、貴女部屋に閉じこもるから大変だったのよ？」

何、私の恥ずかしい過去話を暴露しようとしてるんですか……。

「とつ、ところで捨虫の魔法の話ですが……」

「ああ、そうだったわね。貴女ちよっと前に子供を生める身体になったわよね？」

「え、ええ」

そうなのだ。

前世では12歳過ぎた頃に月のものが始まったので今回は遅いなと思っただけ2ヶ月前に突然始まった。

……14年ぶりだったので自分の血を見てちょっと焦ったのは秘密よ。

「ふふ、あの時の貴女の慌てぶりは面白かったわよ」

「あつ、あれは……」

「まあ、そういうことでそろそろ捨虫の魔法を教えてもいいかなってね」

どうやら子供が生めるかどうか基準だったみたい。

でも幻想郷に行っちゃったらそんな相手いないのよね。

人里に行けば男はいるのしょうけど……種族とか寿命の問題があるし。

探せば男の妖怪もいそうだけど……。

て、何もつ子供産む事を考えてるのよ！ 私まだ14なのよ！？

そりゃ前世と合わせたら三十路所かもうあらふおーだけど……。

とっ、とりあえず私にはまだ早いわよ！

「で、捨虫の魔法を教えたら一人前の魔法使いまであと賢者の石を残すだけ……できそう？」

「喘息の調子が良ければ出来る、かも……」

「そう……それじゃあ今度調子がいい時にでも練習しましょうか、久しぶりにお母さんも手伝うわ」

そう言ってお母さんは私に捨虫の魔法を教えて部屋を出て行った。

——ふふふ、これで私は不老になった！ これで老化とはさよならよ！

ガチャ——。

「あ、そうそう貴女気にしてるようだから教えるけど、捨虫の魔法使うともう身長伸びなくなるからよく考えてね。おやすみパチュリ——」

——ボタン。

急に戻ってきたお母さんは言っただけ言っただけ直に出て行った。

「……………」

ちなみに、今の身体情報を明かすと、上から多分85、53、78、そして身長が140くらい。

身長が140くらい……。

……それから数日、私はずっと不貞寝をして過した。

3 ページ目 「魔法使い、不貞寝する」(後書き)

ここまでお読みいただきありがとうございます。御座います。

2011/08/01 改訂

スリーサイズ、とりあえず胸だけ決めて他適当です。

この数値おかしくね？って感じたら一報下さい。

一応、平均サイズとか参考にこのくらいかな？と決めました。
正直よくわからないです。

2011/08/12 修正

ご指摘頂きましたのでスリーサイズ見直しました。

身長140の理想データが上から74、51、77(端数切捨)な
のでこれを元にしております。

胸でかいので他も若干理想より大きめにしてみました。
とりあえず大きい胸には夢が一杯詰まってるんです！

4 ページ目 「魔法使い、旅に出る」(前書き)

なんか、大幅に変えるつもりが余り変わらなかった気がする……。
ま、まあ似たような流れですがかなり変えたつもりです。

でわ、どうぞ。

4 ページ目 「魔法使い、旅に出る」

4 ページ目「魔法使い、旅に出る」

――捨虫の魔法を使って数日。

暫く不貞寝していた私はいつか身長を伸ばす魔法か薬を作る事を決意し部屋を出た。

そうだ、もし作事が出来たらレミリアにも教えてあげよう。

外へ出た私はお母さんに魔法の練習をする事を告げ、練習用の部屋へと入る。

この部屋の壁は特殊な魔法が施しており、ちよつとやそつとでは壊れる事がないらしい。

部屋の中央に立ち、精神を集中して『賢者の石』の詠唱を始める。

今日は朝から喘息の調子がいい……これなら成功する。

何故かそう思えた。

咳で詠唱が止まる事も無く、詠唱が終わると身体から魔力が抜けていき……成功の証である五色の宝石のような物が私の周りを漂う。
この宝石はそれぞれが五行の属性を持っており、一度発動すると各

宝石から強力な魔法が暫く自動で放たれる。

「おめでとう、パチュリー」

いつの間に居たのかお母さんが部屋の隅に立っていた。

「これで貴女も一人前の魔法使いね」

「ありがとうございます……ところでこれどうやって消すんですか？」

お礼を言い、私は回りを漂う宝石をどうやって消すのかお母さんに訊ねる。

「時間経過による自然消滅か、発動させて宝石に込められた魔力を使い切れば消えるわよ」

「ちなみにお母さんはどれくらいで自然消滅するんです？」

「私のは大体10分ね。貴女は魔力量が多いし20分はかかるんじゃないかしら」

「結構かかりますね……」

「全力で発動させれば多分1分以内に消えると思うわよ」

と、言う事で全力で賢者の石を発動させてみた。

折角喘息の調子がいいのだから撃てる時に撃っておかないと次はいっ撃てるかわからないでしょ？

結果、1分ジャストで賢者の石の効果は切れたが部屋の壁は所々罅が入りボロボロになった。

……確か原作の賢者の石って40秒くらいじゃなかったかしら？

もしかして私、原作よりも強くなってる？

霊夢に勝てたりして……。

妹の件で霊夢と対峙してる自分を妄想してみる。

「なによ、また来たの？」

「また来たの」

「今日は喘息の調子もいいから、とっておきの魔法、みせてあげるわ！」

そして私の月符『サイレントセレナ』の宣言で弾幕勝負が始まる。

私の弾幕で次第に追い込まれていった霊夢は夢想封印を使い、スペルブレイクに持ち込む。

そんな霊夢を私は嘲笑いながら日符『ロイヤルフレア』を宣言する。

再び追い込まれた霊夢の顔には焦りの色が見える。
私がここまで強いとは思っていなかったのだろう。

もう少しで倒せる！

そう思った時、急に咳が出始めた為、ロイヤルフレアを維持しきれずスペルブレイクしてしまった。

焦った私は『賢者の石』を宣言しようとするも喘息で宣言できず。

そして苦しんでいる所へ霊夢が近づいてきて――。

ゲシッ！ むきゅっ！？

私に蹴りを入れて通り過ぎて行く霊夢。

そして残ったのは苦しみながら地に伏せる私。

……あれ、なんで私妄想で負けてるの？
しかも喘息で苦しんでる所に蹴りとか原作でも無いような展開にな
ってるし……。

てっ、てかこの霊夢こわすぎっ！

これ絶対、楽園の素敵な巫女じゃないわね、きっと鬼巫女の方よ…
…。

とりあえず、巫女には手を出さないでおきましょう、うん。

妄想でガクブルしてるとお母さんが話しかけてきた。

「パチュリー大丈夫？」

「え、ええ……」

「そう……。ねえパチュリー、世界を見て回りたいと思わない？」

「突然どうしたのです？」

「修行を終えて一人前になった魔法使いは、暫く旅に出ることになつてるの」

「そうなのです？」

詳しく聞くと、魔法使いとしては一人前でも魔法以外の事ではまだ未熟。

だから見聞を広める為に暫く旅をして来いって事らしい。

レミリアを見つけて原作のように親友になる為には丁度いいわね。
例の魔法も失敗の原因が分からないし、いい機会だわ。
問題があるとすれば喘息なのだが……。

「……戻ってこれないかもしれないけど旅にでるわ」

もしかしたらそのまま幻想郷に行く事もありえるし、喘息でピチュインなんて事もありえるので戻らないかもと伝える。

「そう……いつでも戻ってきていいからね」

——そして翌日。

私は選別としていくらかのお金をもらい、お母さんに見送られつつ家を出る。

徒歩で街へ向かってもいいのだが喘息が怖いので家にいつも来る商人の荷馬車で町まで乗せてもらう事にした。

「しかし、ノーレツジさんとこの嬢ちゃん一人で一人旅たあ立派なことだ」

荷台は売り物であふれかえってるので私は御者が座る席に商人のおじさんと一緒に座っている。

そしてこのおじさんは頻りに私に話しかけてくる。

私は本を読んでいるので適当な相槌ばかりだけどそれでも話しかけてくる。

ロリコンなのかしら。

「ところで嬢ちゃん」

先ほどまで和やかな雰囲気醸し出していたおじさんが急に真面目な顔になり言う。

「……なに？」

「一人旅するのはいいが最近この辺りで物騒な噂があるから出来る限り誰かと行動した方がいいぞ」

何かと思えば、物騒だから気をつけろって事みたいね。

「物騒な噂？ 通り魔か盗賊でも出るの？」

「いや、何でもこの付近に吸血鬼が居るって話だよ」

「吸血鬼？」

……まさか家を出て早々吸血鬼の話聞けるとは思わなかったわ。これがレミリアならご都合主義にも程があるわね。

「ああ、他の商人達が話してる噂なんだが何処からか逃げてきた吸血鬼がこの付近に逃げ込んだって話でな」

「どうしてこの付近にいるって言うの？」

「俺が聞いた話では、その吸血鬼が逃げて来たルートに沿って何人も貧血で倒れた奴が居たらしくてな、それで——」

「貧血で倒れた人達の位置を辿っていったら次はこの辺って事かしらね」

「そういうこった。まあ、あくまで噂に過ぎないが用心するに超した事はねえからな。ところで——」

吸血鬼の話が終わったのか再びおじさんはどうでもいい話を私に振ってくる。

それにしても、逃げてきた……か。

妹を幽閉してるはずだから屋敷を捨てて逃げるなんて出来ないはずだし……レミリアじゃなさそうね。

しかし……折角レミリアと会えるかもってちょっとわくわくしてたのにどうしてくれるのよ。

こうなったらその吸血鬼を見つけたらロイヤルフレアで焼くことにするわ。

もちろんレミリアについて何か知ってるか情報を聞き出してからだけど。

その後も、おじさんからの一方的な話をしながら馬車に揺られる事1時間、やっと街に到着した。

さて、街に着いたのだが今の時間は既に夕方に差し掛かっている。

本当ならここで馬などの足を手に入れて別の街へと思っていたのだが今日は辞めた方が良さそうね。

とりあえず宿を目指しましょう。

ちょっと歩くと小さなボロボロの宿が見つかった。

が、周りの誰もその宿には見向きもせず出入りもない。

つぶれてしまったのだろうか？

とりあえず中へ入り営業してるのかを確認する。

中は簡単な作りになっており、カウンターには歳を取った女性が一人座っている。

「けほっ、こんばんは、一晩お願いできるかしら？」

「あらあら、久々のお客さん！　しかもかわいい女の子、お父さんかお母さんはどうしたの？」

「今は居ないわ、一人で旅をしてるの……けほっけほっ」

「まあそっなの？　うちの孫にも見習わせたいねえ」

受付を済ませ、女性が部屋へ案内すると言つので向かおうとすると入り口のドアが開き誰かが入ってきた。

「おばあちゃん、頼まれた物買ってきたよ………ッ！？」

入ってきたのは手に買い物かごを持ち、綺麗な金髪をポニーテールにした女の子だった。

女の子は私が居るのに気づいて一瞬驚く。

女の子の様子から考えて、客が居ないのが当たり前になってくるくらい久しぶりの客の样ね。

「こんばんは」

「……こんばんは」

女の子へ挨拶をすると、何故か警戒しながらも挨拶を返してくれた。でも女の子を見ていると何か違和感を感じるのよね。

何かしら、この感じ。

「おかえり、イヴ。今日は久々のお客さんが来てね、部屋に案内する所だったのよ」

「あ、なら私が案内するわ。おばあちゃんは夕食の用意をお願い」

「おや、珍しく今日は手伝ってくれるんだね。何かいいことでもあったのかい？」

「久々のお客さんなんだから、私も張り切らないとね！ それじゃあお客さん着いてきて！」

そう言っただけで持っていた買い物かごを女性へと渡し、案内する為歩いていった。

私はイヴと呼ばれた小さな女の子について行き、案内された部屋へと入る。

部屋へ入りながら、明日の予定を考えていると何故かイヴも一緒に入ってきてドアを閉める。

身長も近いし話でもしたいのかな？

ふふ、やっぱり子どもは可愛いわね。

——なんて考えてた時期が私にもありました。

「おい。貴様何者だ」

現在私は、糸に絡めとられ身動きが出来ない状態でイヴと対峙している。

どうしてこうなった……。

4ページ目 「魔法使い、旅に出る」(後書き)

ここまでお読みいただきありがとうございます。御座います。

4話目なんとか投稿しました。

正直言うと若干妥協した感が……。
大幅に修正つてことは無いですが、気になる所が見つかればちょっと変えるかも。

あと話作るのがって難しいですねえ。
100話超えてたりする作者様マジで凄いですわ……。

5 ページ目 「魔法使い、吸血鬼に会う」(前書き)

お待たせしました、5 話目です、どうぞ。

5 ページ目 「魔法使い、吸血鬼に会う」

5 ページ目「魔法使い、吸血鬼に会う」

「おい。貴様何者だ」

先ほどまで笑顔だったイヴちゃんが鋭い目つきでこちらに殺氣を向けながら聞いてくる。

あ、ありのまま今起こった事を話すわ。

可愛らしい少女だと思ってたイヴちゃんの雰囲気がいきなり変わったかと思えば、私は系に絡めとられて殺氣をぶつけられていた。

何でこんな事になってるのか分からないと思うけど私も何でこんな事になってるのかわからないわよ……。

頭がどうにかなりそうだわ。

催眠術だとか超ス「おい、聞いているのか！」ピ……。

「……大声出さなくても聞こえてるわよ」

どうやら逃避はさせてもらえないらしい。
現実是非情である。

私の態度が気に入らないのか絡みついた系の締め付けがきつくなってくる。

「もう一度聞く。貴様何者だ」

「な、何者かって言われても、ただの旅人と言えないのだけど……」

「この宿は、人払いの結界が張つてある。ただの旅人が入ってこれると思えんがな……これが最後だ、貴様何者だ」

人払いの結界……通りで誰もこの宿を見向きもしないわけね。しかし……これは正直に言った方がよさそうね。

「……………魔法使いよ」

「その魔法使いが、この街に何の用だ」

「旅の途中で寄つたのよ。この街で必要な物を揃えようと思って」
「……………」

私が嘘をついていないかどうか確かめるようにイヴちゃんがこちらをじっと見つめてくる。

「……………嘘は、言っていないようだな」

「分かってもらえたのなら殺気を抑えてくれると嬉しいのだけど……」
「……………」

そう言うと先ほどまで肌に刺さるように感じた殺気が消え、糸の拘束が解かれる。

「何か妙な事をしたらわかってるな？」

「……わかったわ。ところで貴女何者なの？ ただの子供じゃないようだけど」

「ふん、言わなくても予想はついてるんじゃないのか？」

「噂の吸血鬼……とか？」

「分かってるじゃないか……どうだ、怖いかな？」

うわぁ……レミリアも小さいしまさかとは思ってたけど吸血鬼だったなんて……。

てか何故どや顔なのイヴちゃん。

「……噂の吸血鬼がまさかこんな子供だったとはね」

「子供言うな！ これでも200年は生きてるんだぞ！」

「200年……ロリババアなのね」

「くっ、やはり殺すべきかな？ でも女子供は……」

あれ、よく考えてみたら私も将来はロリババア？
人の事言えないわね……。

「ところで、あのおばあさんは？」

「……認識障害で孫に成りすましてるだけだ」

コンコンッ

ノックが聞こえた瞬間、イヴちゃんが素早い動きでこちらに近づき、私をベッドへ座らせ、自身はイスに座る。

「お客さん、夕食が出来ましたよ。あとそちらにイヴはいるかしら？」

ノックをして先ほどのおばあさんが入ってくる。

「やっぱりここに居たんだね」

「ごめんなさい、おばあちゃん。お姉ちゃんの話が面白くてつい話し込んでしまった！」

「あら、そうなのかい？　うちの孫が世話になったね」

おばあさんに見えないのを良い事に、イヴちゃんがこちらを睨んできた。

きつと話を合わせると言いたいのだろうか。

「……こちらの話ができて楽しかったわ」

「お姉ちゃん、ご飯食べに行こう！」

「え、ええ」

そして夕食中、おばあさんも旅の話を聞きたいと言って来たので食後のお茶を飲みながら話をする事に。

「知ってるかしら、竜って本当に存在するのよ？」

「へえ、てつきり御伽噺や空想の生き物だと思ってたよ」

「かなり遠い大陸に住んでいるのだけど……その竜は変わった習性があったね」

「どんな習性なんだい？」

「まず、雄は子供を作る為に自分の巣を作るの。そして大きな巣と沢山の財宝を用意して雌を自分の巣へ呼ぶのよ」

「雌のために巣や財を用意するだなんて雄はカッコいいことするんだね」

「そして、呼んだ雌が巣を気に入れば子供を作るらしいわ」

「気に入らなかつたらどうなるんだい？」

「その竜種は雄よりも雌の方が何倍も強くて、気に入らなかつたら雄は雌に殺されたりするらしいわ」

「そりゃ怖い話だねえ」

先ほどからおばあさんが相槌をうつてくれるがイヴがずっと静かなのでチラッと様子をみる。

寝てはいない様だがこちらを見て若干唖然としているようだ。

「……おや、お茶がなくなっちゃったね、淹れてくるよ」

おばあさんがよっころせと言いながら席を立ち、調理場へと向っていった。

「おい、急遽作った話にしてはかなり設定が作りこまれてないか？」

おばあさんの姿が見えなくなるとイヴちゃんが聞いてくる。

「……こういう設定の話を以前見たことがあるのよ」

「なんて話だそれは？ 機会があれば私も見てみたい」

「巢作り竜って話よ。ざっと流し読みしただけだから余り憶えてないけど」

「そうか」

その後、おばあさんが戻ってきたので話を再開し、気づけば日付が変わろうとしていた。

「もうこんな時間かい。悪いねえ、お客さんなのにこんな時間まで話をさせちまって」

「いえ、私も話が出来て楽しかったわ」

「イヴももう遅いから寝なさい」

「はい」

「じゃあ私も部屋に戻って休むわね」

「はい、お休み」

そして私は部屋へと戻り、眠りにつく。

翌日、おばあさんに挨拶をして宿を出る。

その時、イヴちゃんが居なかったのでどうしたのかと聞くと、朝が弱くていつも起きれないのだとか。

……200年生きてても身体は子供だし仕方ないのかしらね。

宿を出て馬と薬を買い、現在本を取り扱っている店に来ている。家から何冊か持ってきた魔道書だけではやはり物足りないのよ。

「どれが良いかしら……これは……？」

一冊の本を手に取り、タイトルを見る。

『魔法少女りりかるアホナンと蒼い石』

「何か引つかかるタイトルなんだけど……何故かしら」

気になったのでちょっと立ち読みしてみる。

内容は簡単に言えば白い魔法使いアホナンが黒い魔法使いテファと蒼い石を巡ってバトルする話――。

なんだけど、どこかで見た事あるのよね。

ちなみに中身はこんな感じよ。

『受けてみて、シタデルバスターのバリエーション!!』

『Ultimate Breaker』

『んっ……ッ!? バインド!? くっ! 世界はいつも、こんなはずじゃない事ばかりだよ!』

『究極全壊!! アルティメットッ! ブレイカアアアッ!!』

『……………ごめん、お母さん。約束守れそうに——』

『テフアアアアッ!!』

本を選ぶ為に何時間も店にいた為、先ほどから店主の視線が痛い。それに、気がつけば夕方間近だったので急いで本を買って街を出た。結局さっきの本を買ったわ。

で、街を出たのはいいんだけど次の街までかなりあるみたい。近くに川があるみたいだし、今日はそこで野宿かしらね。

辺りは真っ暗で、聞こえてくるのはパチパチと薪が弾ける音と虫の声。

そして、本のページを捲る音のみ。

「……………」

私はたき火の側に座り、今日買った本を読んでいる。

「ふう……………」

半分ほど読み終わった所で一息つく。

気づけば深夜と言っても問題ないくらい辺りは真っ暗になっていた。

程よい眠気も来てるし寝てもいいのだけど……。

経験上、続きが気になって眠れないので続きを読もうと思ったその瞬間、突如街の方から轟音が響く。

「ッ!？」

何事かと慌てて街の方を向くと街の一角から火柱や氷といった物が
見えた。

そしてそれらはどんどんこちらに向かってきている。

このままでは巻き込まれると判断した私は、急いでこの場を離れる。
が、やはり気になるのでちょっと行ったところで息を潜めて様子を
伺う事にした。

暫くして、轟音と共に一人の少女と男が現れた。
少女は格好こそボロボロだが立ち方などからかなり余裕そうに見える。

そして男のほうは無傷だが若干疲労の色が見えた。

「はぁ……はぁ……。やっと追い詰めたぞ吸血鬼！」

「まさかあの宿ごと吹き飛ばしてくるとはな……」

「正義が悪を滅ぼす為なのだ、宿の一軒や二軒どうってことはないだろう」

「正義の為なら仕方ないって事か。いつ聞いても反吐がでるな。貴様等はそれで一体何人巻き込んで殺したんだ？」

「殺しただなんて人聞きの悪い。彼等は正義の為に犠牲になったのだよ。悪である貴様を倒す為にな」

「……………そうか、ならお前は悪である私に殺されても文句は言えんな」

「ふん、先ほどまで散々逃げ回っていた化物風情が正義の魔法使いである私を殺すだと？」

「……………馬鹿もここまでくると哀れだな」

「黙れ化物がッ！」

そう言つて男が何かを呟くと炎で出来た矢が数十本現れ、少女へと迫る。

それに対して少女は――。

「氷爆！！」

その言葉と共に少女の目の前に大量の氷が出現し、凍気と爆風が辺りを包み男の放った炎の矢をかき消した。

「なんだ、もう終わりか？　今度はこちらからいくぞ。リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」
「くっ！　化物の癖に生意気な！　チャム・ヤム・ヤチャ・ムム・ヤムチャー！！」

少女の詠唱に合わせ、男も詠唱を始める。

「来たれ氷精、闇の精！！」
「ものみな焼き尽くす浄化の炎オ！！」

詠唱しながら男はニヤニヤしている。
撃ち合いでは負けれないと思っているのか、それとも何か秘策でもあるのか――。

「闇を従え、吹雪け、常夜の氷雪……闇の吹雪！！」
「破壊の主にして再生の徴よ、我が手に宿りて、敵をぐあああ」

少女の魔法の方が早く完成し、闇を纏った吹雪が男は襲う。
男は詠唱中だった為か、避ける事も出来ずに直撃し動かなくなった。

「ふん、撃ち合いをするつもりなら詠唱の長さくらい覚えておくんだな……さて、いい加減出てきたらどうだ？」

そう言ってこちらを向く少女。

どうしようかしら……と、とりあえず。

「にゃーん……………けほっけほっ」

「……………」

「……………」

「はあ……………さつさと出て来い」

「……………にゃ、にゃー」

「……………リク・ラク・ラ・ラック」待つて、出て行くから待つて！」

「……………」

なにやら魔法の詠唱を始めたので慌てて茂みから出る。

そして少女と対峙しているのだけど……………。

暗かったり、後ろ向いてたりでよく見えなかったけど……………噂の吸血鬼イヴちゃんでした。

「こ、こんばんは……………イヴちゃん」

「……………お前が宿を去った夜に襲撃があつたんだが、あの男はお前の仲間か？」

そう言つて息絶えた男を指差す。

「ち、違つわよ」

「……………そうか」

そう言つと森の奥へと進んでいく。

「どこ行くの？」

「追つ手に見つかつたんだ、別の町へ行く」

「そう……………ねえ、一つ聞いてもいい？」

「なんだ？」

「レミリアって吸血鬼知つてる？」

「……………知らん」

そう言つて森の奥へと消えていった。

残された私はたき火のあつた場所に戻つただけど……………。
辺り一面、凍つてたり、焦げてたりでボロボロだった。
そしてここまで乗ってきた馬は――。

綺麗に丸焼けになっていた。

逃げないように木につないでいたのは失敗だったわね。

「はぁ……………不幸だわ」

5 ページ目 「魔法使い、吸血鬼に会う」(後書き)

ここまでお読みいただきありがとうございます。御座います。

とりあえず5話目投稿です。

『まとまらず 悩んだ末に ネタをいれ

気づいてみれば 駄文完成』

この一話を短歌で表してみました。

まあ、読んでクスッとでも笑ってもらえたのなら幸いです。

シタデルバスターにピンと来た方はきっとプロマシアの試練を乗り越えた立派な冒険者なのでしょう。

ちなみに作者はまだ戦ったことないです。
引退までには一度戦いたいものです。

6 ページ目 「魔法使い、吸われる」 (前書き)

6 話目なんとか投稿しました。

それではどうぞ。

6 ページ目 「魔法使い、吸われる」

6 ページ目「魔法使い、吸われる」

あの後、馬を失った私は街まで歩いて戻った。
何度か休憩しながらだったが、街に着く頃には体力は限界を超えていた。

「はぁ……はぁ……出発は、明日でも……いいかしらね……」

今日はもう動きたくないなので早速宿へと向う。

今回の宿は一階が酒場になっているちよつと大きな宿。

カウンターへ近づきマスターに部屋が空いているか確認する。

「部屋は、空いてるかしら？」

「ん？ ガキ一人か……一晩でいいのか？」

「ええ」

「部屋は205号室を使え。これがカギだ」

ヒゲの生えたダンディなおじさんからカギを受け取り部屋へ向う。
部屋へ向う途中、酒場で飲んでいた連中の話が聞こえてくる。

「そついや、聞いたか？ 例の宿のばあさん、孫娘に化けた吸血鬼に操られてたらしいぜ」

「なんだそれ。俺が聞いた話じゃ、ばあさんが吸血鬼で孫娘が操られてたつて聞いたけど」

「まじかよ……どっちが本当なんだ？」

「わからん。でも孫娘が吸血鬼の方が可愛いし俺はそっち信じるぜ！」

「だよな！ やっぱ可愛い方がいいよな」

……なんか色々ダメな会話が聞こえてきた。

その後、部屋に着いた私は疲れの為かすぐに眠りへと落ちた。

翌日、馬を買いに行くときまた来たのかと店のおじさんに驚かれた。まあこんな短期間で二頭目を買いに来る娘なんて普通いないだろう。

「なんだい、また来たのか……前の馬どうした？」

「野宿してたら襲われて馬がやられちゃったのよ」

「そうか、そりゃ災難だったな……次はこれなんてどうだい？」

そつ言つて店のおじさんが黒くて大きいものを見せてくれた。

「すごく……大きいです………つて流石に大きすぎないかしら？」

私は、自分の身長の二倍以上ある大きな馬を見上げながら言う。

「知人に貰った馬なんだがな、言うこと聞かないし餌は馬鹿みたいに食うから商売にならなくてよ……」

「そんな馬売ろうとしないでよ……」

「はあ……やっぱダメかあ。ほら、戻るぞコクオウゴウ」

そう言っておじさんは馬を戻しに行った。

何か聞いたことある名前だったけど気のせいよね。

次におじさんが連れて来たのは赤い毛並みの大きな馬。
先ほどの馬のこともあり、見た瞬間いらなと言った私は悪くないと思う。

「まったく、何がダメなんだ？ いい馬なのに……なあセキト」

なんなのよこの店……。

その後、なんとか普通の馬を売って貰い次の街を目指す。
と、道の反対側から見覚えのある商人が見えた。

「おや？ ノーレッジさんとこの嬢ちゃんじゃないか、まだこんな

所にいたのかい？」

街まで乗せてもらった商人のおじさんが私の顔を見るなり話しかけてくる。

「ええ、ちょっと色々あつてね……」

「そういや吸血鬼が出たんだっけか……仲間がなんか言つてたよ、吸血鬼の正体は男だって。宿吹き飛ばしたのもその男らしい」

なんか見られてたらしい……魔法の秘匿はどうした、正義の魔法使い。

「そ、そうなの？」

「ああ、信じてくれ！　つてうるさいからみんなで殴って黙らせたよ……まったく、教会連中に聞かれたらやばいつてのに」

「……ああ、魔女狩りね」

「そうそう、あいつらちよつとでも怪しい素振り見せたら魔女だなんだって言つてきて財産もって行きやがる」

「酷いわね」

「ああ、この前うちの商会の奴も数人やられちまつてな」

「おじさんも気をつけてね」

「ありがとよ、でも嬢ちゃんも気をつけな。奴らは金だけじゃなく、嬢ちゃんみたいな可愛い娘も狙うからな」

「え、ええ。き、気をつけるわ……」

「ん？　顔が赤いがどうした？　風邪か？」

「な、何でもないわよ……」

「そうか、じゃあな」

そう言っておじさんは馬車を走らせていった。

「……急に可愛いとか言うからちょっと焦ったじゃない」

それにしても魔女狩りね。

私も気をつけないといけないわ。

「それにしてもその歳で旅か、立派だね……はい、これが許可証ね」
「ありがとう」

私は門番に許可証を貰い、街へと入る。
街へ入った私は既に日が沈んでいる時間だったのですぐに宿へと向う。

「――？」

「――」

宿を目指していると路地の方から話し声が聞こえてきた。
嫌な予感がするのだけど……ちょっと見るくらいはいいわよね。
通りから路地に入り顔を覗かせると――。

「なあ、嬢ちゃんいいだろ？」

「や、やめろ……」

「せっかくおじさんが優しくしてあげようって言うてるのに……魔
女認定するぞ？」

「で、でも……」

なにやら女の子が男に言い寄られているらしい。
女の子は徐々に壁へと追い詰められている。

「このままだとノクターンになりそうね……あれ、ノクターンって
何かしら？」

何か電波っぽいものを受信したけど女の子を助けた方がいいわね。
でも魔女認定云々ってのが気になるのよね……姿を見られなければ
何とかなるかしら？

私はゆっくりと男の背後へと近づいていく。

「こっちは別に魔女認定してもいいんだぜ？ どっちにしてもやれ

「そこまでよっ!」うがッ!」
「うお!？」

私は大きく振りかぶり、分厚い本の角で男の後頭部を強打した。
男は女の子へ覆いかぶさるように倒れ、女の子は驚きつつもそれを避ける。

「くっ、な、何が……」

「あ、まだ意識があるのね。えいッ! えいッ! えいッ!」

「あべッ! ふくッ! あそッ!」

「はぁ……はぁ……」

「……………」

「これでよし……大丈夫?」

男が動かなくなったのを確認し、女の子へ声をかける。

「……………何をしてるんだお前は」
「へ?」

女の子へ声をかけると、数日前にも聞いた声が返って来た為、女の子をよく見る。

よく見れば少し薄汚れているが綺麗な金髪で私よりも若干小柄な女の子、イヴちゃんだった。

「イヴちゃん!？」

「で、こんな所で何してるんだ？」

「私は襲われそうになってたから助けに……それよりもなんでこんな所に？」

「逃げてる途中で魔力を回復させる為にちよつと血をわけてもらおうと思つてな」

そう言つて倒れた男の首筋に噛み付きごくごくと喉を鳴らし始めた。数秒後、男の首筋から顔を離し、口元をぬぐう。

「ちつ、多少は魔力が回復したが、やはり不味いな……ん？」

血が不味かつた事に文句を言いながら何かに気づいたのか私をじつと見つめてくる。

「……………なあ」

「な、なにかしら？」

一歩こちらに近づくイヴちゃん。

私は近づくイヴちゃんに言い知れぬ恐怖を感じ、一歩後ろへ下がる。

「魔力を持った女の血は極上のワインの様に美味しいのを知ってるか？」

「へ、へえ……そうなの？」

また一步近づくとイヴちゃん。
私もまた一步下がろうとしたが、背中が壁にぶつかりこれ以上下がる
ことが出来なくなった。

「ふふふ、心配するな……痛いのは最初だけだ」

「イ、イヴちゃん？ お、落ち着いて、ね！」

「ふふふ……」

両肩をガシッとつかまれ逃げようともかくがどうにもならない。
そしてイヴちゃんは口を開け、私の首に――。

「あ……い、いやぁーッ!!」

チクッとした痛みを感じた後、身体から徐々に力が抜けていき――。

気がついたら知らない天井が見えた。

「……………お約束はやらないわよ？」

「何言ッテンダ？」
「ッ！？」

横から急に声をかけられた為、びっくりして飛び起きる。
が、起きた瞬間、眩暈がしてよろよろとその場に座り込んでしまった。

「おい、血が足りてないんだから無理するな」

声のした方を向けばイヴちゃんが椅子に座ってこちらを見ている。

「イヴちゃん？ それにここは……？」
「……覚えてないのか？」
「えーっと………あ！」

言われて何があったのか思い出した。

「思い出したようだな」
「思い出したようだな、じゃないわよまったく……それよりもなんで私ここで寝てたの？」
「あー、その、なんだ……余りにもお前の血が美味しかったからつい吸い過ぎてしまったな」
「吸い過ぎたって……どの位吸ったの？」
「………もう少し気づくのが遅れたら危なかった」

「……………」
「トコロデ、俺八何時マデ空気デ居レバインダ？」
「だ、誰？」

声のした方を見るが誰も居ない。

在るのはコウモリのような羽の生えた人形だけ。

「……………何処にいるの？」
「何処ヲ見テンダ？ 俺八此処ニイルゼ」

そう言つて人形が立ち上がりこちらに近づいてくる。

「人形が一人で動いてる!？」
「魔法使いのくせにそこまで驚くことか？」

私が人形に驚いているとイヴちゃんが言う。

「実際に目にしたのは初めてだったからつい……………で、この人形は？」

その人形の大きさは七十センチほどで緑色の髪をしている。
……………ちよつと可愛いかも。

でもどこかで見たとあるんだけど……………どこだったかしら。

「そいつはチャチャゼロといって、私の従者だ」

「ヨロシクナ、紫モヤシ」

「紫もやし！？ いや、それよりもチャチャゼロ！？」

「ン？ 俺ノ名前ガドウカシタノカ？」

「あ、いや……どこかで聞いた事ある気がする……」

「ほお……」

チャチャゼロつてもしかしてあのチャチャゼロ？

でも確かに容姿とか前世で見た本のまんまなのよね……。

チラッとイヴちゃんの方を見してみる。

綺麗な金髪に白い肌、そして深い蒼色の瞳でまるで人形のような容姿。

……うん、よく見ればエヴァンジェリンだわ。

なんで今まで気づかなかったのかしら……認識障害が掛かってたせい？

と考えているとイヴ、いやエヴァンジェリンと目があった。

「どうした、私の顔に何かついてるか？」

「……ねえ、もしかしてだけど……エヴァンジェリン？」

「ほお……大人の姿ならまだしも、まさかこの姿で気づかれるとはな。ちなみにどこで気づいた？」

「えーっと……この人形を見て……」
チャチャゼロ

「俺モ随分ト有名ニナッタモンダナ」

てかなんでエヴァンジェリンが此処にいるのよ……。

型月かと思えば今度はネギまの世界？

始動キーもあるみたいだし…… 外の世界はネギま世界の可能性が濃厚みたいね……。

この感じだとレミリア達がいるのかすら怪しくなってきたわね。

これは一度日本に行って幻想郷が…… いや、博霊神社があるのか確かめないといけないわね。

「しかし、私の正体に気づいたのにやけに冷静だな。普通の奴なら命乞いか攻撃してくるぞ」

色々考えているとエヴァンジェリンが聞いてくる。

「女子供は殺さないのを知ってるから…… それに冷静そうに見えて結構焦ってるわよ？」

「たとえば？」

「そうね、これからどうしよう…… とか？」

「なんだそれは……」

いや、本当にどうしようかしら……。

今16世紀後半だから日本はそろそろ室町幕府が終わるはず、下手したらもう終わってるかも？

次の江戸幕府になったら鎖国しちゃうからそれまでに日本に行かないと……。

でもどうやって博霊神社に行こうかしら。

……所でエヴァンジェリンはこれから暗黒大陸、今で言うアフリカ大陸へ向うのだろうか？
せっかくのネギまキャラだし、着いて行ってみたいけど日本にも行きたいし……。

ああ、ダメだわ……血が足りない状態で考えすぎてふらふらしてきた。

「うう……貧血でまだふらふらするしもう一眠りさせてもらっわ……」

私はベッドへ戻り横になる。

「オウ、寝口寝口」

「好きに寝ればいい、ここはお前の金で取った部屋だしな」

「ちょ……もう残り少ないの……に……zzz……」

お金について文句を言いたかったが、体が睡眠を欲しているのか眠気には勝てず眠りへと落ちていった。

6ページ目 「魔法使い、吸われる」(後書き)

ここまでお読みいただきありがとうございます。御座います。

はい、遂にイヴちゃんの正体が明らかになりました。

……まあネギまと改訂前知ってる人にはバレバレですけどね。

7ページ目 「魔法使い、船に乗る」(前書き)

7話目です、どうぞー。

7ページ目 「魔法使い、船に乗る」

7ページ目「魔法使い、船に乗る」

翌朝、目が覚めた私は起き上がって体の調子確かめる。

……まだ若干血が足りないのか気怠いが動けない事は無さそうだ。

「オウ、起キタカ」

「ええ、おはよう」

起き上がって調子を確かめっているとチャチャゼロが話しかけてきたので私は挨拶を返し所持金の確認をする。

「……………」

硬貨が6枚のみ。

これでは本が買えないし次の街で宿にも泊まれない。

一瞬馬を売ろうかなと考えたが移動手段がなくなるのですぐに却下した。

働いてもいいのだが日雇いで働けるところがあるのだろうか？

「どうしようかしらね……………」

「金稼ギナライイノガアルゼ」

悩んでいるとチャチャゼロが話しかけてきた。

「何？」

「御主人ハ、今250万ドルノ賞金首ダ」

「捕まえて賞金を貰えって？」

「マア、ソウナルナ」

自分の主人を売るとかどんな従者よ。

……と、思いつつも私の視線はベッドで寝ているエヴァンジェリンへと注がれている。

寝首を搔くなんて言葉があるけど今ならいけるかしら？

ベッドの横に立ち気持ち良さそうに眠っているエヴァンジェリンを見下ろす。

「Z Z Z …… Z Z Z ……」

「……………」

「殺ルナラ今シカネエゼ」

「……………はぁ」

ため息をつき、私は椅子に座って本を読み始める。

「ツマンネーナ、殺ツチマオウゼ」

「嫌よ、不死殺しが無いからやるだけ無駄だし……それに起きてるんでしょ？」

私が声をかけるとエヴァンジェリンが起き上がる。

「なんだ、バレてたか……」

「ええ。それよりも、こここの宿代出しなさいよ……たっぷり吸ったんでしょ？」

「……仕方ないな、ほら」

そう言ってカバンからお金の入った袋を投げて寄こすエヴァンジェリン。

私はそれを受け取って中身を確認し、カバンに入れる。

かなり多めに入ってたしこれで当面は何とかなったわね

「ところでその本の続きはないのか？」

本を読んでいるとエヴァンジェリンが聞いてくる。

その本というのは例の魔法少女の本である。

「残念ながら今はこの一冊しかないわね」
「そうか」

「教会の中探せば結構あると思うわよ。魔女狩りで処刑した人達の財産没収してるみたいだし」

「教会か……手を出すと後が面倒だな」

「まあ焚書でもされてない限り、いつか読めるわよ」

その後、昼前に宿を出るのだが、何故かエヴァンジェリンが着いてくる。

「……何で着いてくるの？」

「私の正体を知っても態度を変えないお前に興味が沸いた……あと血も美味いしな」

興味が沸いたというのは嘘ではなさそうだが……後半の理由が一番な気がするのには気のせいかしら？

「ところで何処に行くんだ？」

「ポルトガルよ。そこからジパングを目指すわ」

「ジパング……確か建物が黄金で出来ていて、人肉を食う習慣があるとか」

「それ間違いないよ。建物は木製ばかりだし、人肉を食べる習慣なんて無いわよ」

「そうなのかな？」

「ええ、それ伝えた奴どこを見て来たのかしらね」

「やけに詳しいな、行った事あるのかな？」

「ないわよ、私の情報源は本の知識と伝聞ね」

「そ、そうか……」

「ところで、エヴァンジェリンは逃げてる途中じゃなかったの?」
「それなら心配ない。影の転移で撒いてきたから暫くは見つからないはずだ」

そんな会話をしつつ街を出ようと門番の所へ行くと門番に呼び止められた。

「おい。お前達少し待て」

「何ですか?」

「今神父様がこの町に魔女が居るかもしれないということで調べてるんだ」

「へえ……そうなの」

「……ちっ」

しばらく待つと頭に包帯を巻いた神父がやってきた。
その男の顔をみたエヴァンジェリンが顔を歪める。

「やあ、お嬢さん。先日はどうも」

神父は私達にニコニコしながら話しかけてくる。
この男、確かエヴァンジェリンを襲ってた奴よね……もしかして殴ったのがバレたのかしら?

「そちらのお嬢さんは……ふむ」

値踏みするかのように私をじろじろみてる神父。
そんな私達を遠巻きに見てる人たちが小声で話しているのが聞こえる。

「おい、見てみろよ。またあの神父が女捕まえてるぜ」
「次はあの子達なのかい？ 可哀想に……」

喋ってる人達を神父が睨むと静かになった。

「ふむ、この者達は魔女かもしれません。確かめましょう！」

神父がそう言うとき周りの男達はいやらしい目つきを、女達は哀れみの目を向けてくる。

「ちょっと、何を根拠に魔女かもしれないなんて言ってるの？」

まあ……魔女で合ってるのだが、調べるなんて言って犯されるわけには行かないので反論する。

「神の代行者である私に反論するのですか？ ふむ……やはり魔女のようですね」

どんだけこの神父は腐ってるのよ。
てかさつきから鼻の下伸びてるし……ロイヤルフレアで焼いたらダ
メかしら？

「おい……合図したら街の外へ走れ」

神父にロイヤルフレアでも——と考えてるとエヴァンジェリンが小
声で話しかけてきたので分かったと頷く。

「さて、こちらの金髪の娘はどうですか」

そう言つてエヴァンジェリンに近づく神父。
その神父に対してエヴァンジェリンが取った行動は——。

急所への蹴り——金的だった。

「うッ!？」

神父は股間を押さえながら口から泡を吹いて倒れる。

見事に決まったエヴァンジェリンの金的。

周りの男達はもちろんだが付いていない私でさえ、つい股間を押さえてしまう程綺麗に決まった。

そして、余りの出来事に周りの人たちは固まっており、動けないでいる。

「今だ！ 走れ！」

エヴァンジェリンの合図で馬に飛び乗り街から脱出する。

「……あ、ま、まてッ！！」

遙か後方で門番が静止の声を上げるがもう遅い。
そのまましばらく馬を走らせ、暫く行ったところで待つこと数分。
エヴァンジェリンが追いついてきた。

「……無茶するわね」

「ふん、いつものことだ」

「いつもあんな事してたのね……」

一体何人が玉無しになったのだろうか……。

そして夜になり、今日は野宿をする事に。
パチパチと薪が弾ける音が辺りに響く。

私は焚き火の側で読んだ事のある本をまた読んでいる。
エヴァンジェリンは、私が持っていた魔道書『楽しい異世界旅行』
を熱心に読んでいる。
その隣でチャチャゼロは酒を飲んでいるが……あの身体の何処に酒
が消えていくのか。
今度解剖させてもらえないかしら？

「異世界……か」

本を読み終えたエヴァンジェリンが呟く。

「吸血鬼でも受け入れてもらえる世界があるかもしれないわよ？」
「……だいいいがな」

……幻想郷があつたらエヴァンジェリンも誘ってみよう。

「ところでこの魔道書は何処で手に入れたんだ？」

「家の書庫にあったのを持ち出したの」

「そうか……………そういえば貴様の名前を聞いてなかったな」

言われて初めて気がついたが、確かに私は一度も名乗ってない。

「……………確かにそうね。私はパチュリー・ノーレッジよ」

「……………ノーレッジだと？ あのノーレッジか？」

「どのノーレッジか分からないけど、多分そのノーレッジよ」

「そうか……………メリッサという女は元気か？」

「……………お母さんを知ってるの？」

「お母さん……………だと？」

そう言ってこちらをじっと見つめるエヴァンジェリン。

「た、確かに……………言われて見れば奴の格好に似ている気がする」

なんかお母さんと知り合いっぽい……………。

「そうか……………やつの娘か……………」

エヴァンジェリンがそう呟くと、急にどこか遠くを見つめて老け込む。

「えっと……お母さんとはどういう関係なの？」

「賞金稼ぎと賞金首と言ったところだな、奴とは数十年前に何度か戦った事がある」

「あのお母さんが賞金稼ぎ？」

「ああ、そこらの魔法使いよりもかなり強かった」

「あのお母さんが……」

いつも本ばかり読んでるから余り想像できないのだけど……。

「奴はかなり厄介な魔法を使っている……」

「確力二、アレハヤバカタナ。俺モヤラレルトコロダツタゼ」

「そんなにヤバイ魔法であつたかしら……？」

吸血鬼だしやっぱロイヤルフレアとかプリンセスウンディネとか？

「……………メドローアとかふざけた魔法なんだが教えてもらつてないのか？」

「……………え、ええ」

メドローアって……お母さん、なんて魔法使ってるのよ。

確認の為メドローアについてエヴァンジェリンに聞いてみた所――。
『燃える天空』と『えいえんのひょうが』という二つの魔法を合成

させた物なんだとか。

その後、チャチャゼロから酒を奪って飲み始めたエヴァンジェリンから延々と愚痴を聞かされ気がつけば朝になっていた。

そしてポルトガルを目指す事一ヶ月、遂に私達はポルトガルへと到着した。

途中で何度もエヴァンジェリンを狙う魔法使い達に襲われたが殆ど初心者に毛が生えた程度の魔法使いばかりだった。

てか一緒に居るだけで私まで狙ってくるのかなんなのあの人達？

読書の邪魔だったし、正当防衛って事で私も反撃したんだけど。

そのせいか分からないけどいつの間にか私にも賞金がかかっていた……最悪だわ。

「それで、ポルトガルに着いたがここからどうやってジパングに行くんだ？」

「確か、ジパングへの貿易船があるはずだからそれに乗せてもらいましょう」

「乗せてくれるのか？」

「一応考えはあるわ……ダメなら密航するなり、操るなりすればなんとかなるでしょう」

そして港へ行き、船に乗せてもらえるよう交渉を開始する。

「すみません、ジパングへ布教活動に行きたいので乗せてもらえませんか？」

と、ここへ来る途中で買った十字架をちらつかせながら言う。

「……お嬢ちゃん達二人でかい？」

「ええ」

「別に構わんが……荷物には手を触れないでくれよ？ 大事な品だからな」

「わかったわ」

あっさり乗せてもらえた。

適当に考えた案だったのだがなんとかなるもんね。

で、現在船で航行中なのだが……。

先ほどから若い男女のカップルがいちゃいちゃしてるのが目に付く。船員の人に聞いたら、あの二人は商人の娘と船長の息子で幼馴染なんだとか。

そんな二人を観察していると……。

「なあ、結婚……しないか？」

「ッ！？ ええ、ええ……私はその言葉をずっと待っていたわ」

と言って抱き合ってキスしたり。

船首で手を広げて二人で立って、いい雰囲気になったり。

その様子を商人——娘の父親が物凄い形相で見ていたが……多分気のせいだと思う。

「リア充爆発しろッ！」

「どうしたパチエ、急に大きな声を出して」

「気にしないでエヴァ。なんか言わないといけないような気がしたの」

「そ、そうか……」

ちなみにパチエというのは私の愛称で、エヴァというのはエヴァンジェリンの愛称よ。

ポルトガルへの移動中、魔法についてあれこれ言い合ってるうちに愛称で呼び合う仲になった。

「御主人ヨオ、航海中ニ結婚シテクレッテ、死亡フラグジャネエノカ？」

船室でエヴァと二人でのんびりしていると唐突にチャチャゼロが言う。

「……………ま、まさかね」

「……………だな、流石にそれは——」

『ないだろう』と、エヴァが言おうとした途端に何かがぶつかる音がして船体が大きく揺れる。

「……………」

「ヤッチマツタミタイダナ」

「……………不幸だわ」

7 ページ目 「魔法使い、船に乗る」(後書き)

ここまでお読みいただきありがとうございます。御座います。

……ついメドローアだしまった。

でも、ノーレツジなら使いこなせるはずッ！

原作でも水&火符あるんだし、大丈夫さ……多分。

とりあえずエヴァとの距離感が難しい(汗)

急に仲良くなりすぎたら変だし……今回も若干まだ違和感あるんだけど自分が未熟故、もうダメかもわからんね。

Q・ぱちえとメリツサってそっくりって設定だけど何でエヴァは今まで気づかなかったの？知り合いだよな？

A・着てるローブの色とエヴァが顔をはっきり覚えてなかったのが原因。

知り合いと言っても戦場で戦った程度。

ノーレツジは完全固定砲台な魔法使いなので基本接近しません。その為、余り顔を見ていないエヴァは気づかなかった。

吸血鬼の視力なら遠くても顔見えてるんじゃないの？っていうのはきつと気のせいだと思う(汗)

8 話目は9月に入ってからとの投稿になるかと思っています。
流石に月末で忙しいです……。

8ページ目 「魔法使い、賭けをする」(前書き)

8話目です、どうぞー。

8ページ目 「魔法使い、賭けをする」

8ページ目「魔法使い、賭けをする」

「……それで、今の揺れは何だと思う？」

「まあ船に何かがぶつかったんだろっとな……」

「ヤッパリ、フラグダッタナ」

甲板へ向かうと船長さんが船員に指示を飛ばしていた。

「船長さん、何があったの？」

「まだ乗っておられたんですか！？ 実は船底に何かがぶつかって

穴が……それよりも早くボートに乗って脱出を！」

そう言って船員にボートを用意させる船長。

「船長さん達は？」

「私達は皆さんの避難が終わってから脱出します！ それよりも早く！」

「……わかったわ」

で、私とエヴァ、そしてチャチャゼロはボートに乗って沈んでいく船を眺めている。

……ところであのカップルは無事脱出できたのだろうか。

「困ったわね……流石にボートでジパングを目指すのは無理ね」

「そ、そうだな……着く前に絶対沈むだろ」

「……エヴァ、大丈夫？」

「だっ、大丈夫だ、問題ない！」

「ケケケ。御主人ハ、泳ゲナイカラ落ちナイ様ニ必死ダナ」

エヴァは冷や汗をたらたらと流しながら海に落ちないようにボートの端を掴んでいる。

強く掴みすぎて掴んでる所が潰れてるんだけど……。

「と、とりあえず近くに島が見えるし、城も在るみたいだからそこを目指しよう」

そう言って私は近くの島を指差す。

その島には周りを森で囲まれた城が見えた。

「そうだな、早く行くぞ。ボートが沈む前に！」

「マア落ち着コウゼ、御主人。ソウ簡単ニハ沈「やめろ、フラグを立てるな！」」

それから島を目指して数十分。
何事もなく島に到着した私達は城を目指した。

「しかし、なんだこの森は……先ほどから変な生き物ばかりではないか！」

邪魔な植物や飛び出してきた動物を切り裂きながら進むチャチャゼロの後ろを文句を言いながら歩くエヴァ。
先ほどまで海に落ちないように必死になっていた姿はもう何処にもない。

「ケケケ、俺ハ切レレバ何デモイイゼ」

ギョエー！ と奇怪な声で鳴きながら飛び出てきた鳥の様な生き物を、自身の身長よりも大きいナイフで切り裂きながらチャチャゼロが言う。

「それにしても興味深い生き物ばかりね……けほっけほっ、さっきの白い生き物も変わってたし」

「ああ、あれか……途中でチャチャゼロが切り裂いたから完全には聞き取れなかったが変わった鳴き声だった」

「ええ、確か……『ボクトケイヤ——』だったかしら？」

「次見かけたらちゃんと鳴き声を聞いてみたいな」
「けほっけほっ……そうね」

と、話しながら森を進むといつの間にか城へとたどり着いた。

「……人の気配がしないわね」

「どこかの金持ちの別荘とかじゃないのか？」

「そうだとしても管理する人間がいらないとおかしいわ」

「まあ、変な生き物が多いし襲われたんだろっ」

そう言ってエヴァは城へと入っていく。

「まあ考えても仕方ないわね……」

エヴァを追って私も城へと入る。

中は外ほど汚れておらず普通に生活できる感じになっていた。

私はエヴァと手分けして城の中を見て回る。

私は一階を、エヴァは二階を担当。

チャチャゼロはエヴァの命令で私の護衛として一緒に回っている。

「随分と広いわね……気をつけないと迷子になりそうだわ」

「御主人、迷子ニナッテタリシテナ」

「流石にそれは……」

チャチャゼロと話しながら扉を開け、次々と中を確認していく。
一階には調理場にお風呂、客室が複数あった。

「一階はここで最後みたいね」

「ソロソロ切レソウナ物デモ出テコネエカナ」

そんな事を言いつつ一階の最奥、最後の扉を開ける。

そこで目にしたのは無数の本。

それを見た私はつい言ってしまった。

「……………私、ここに住むわ」

「オイオイ、ジパング行クンジャナカタノカヨ」

「で、でも本が……………そうだね、まだ鎖国まで時間はあるし全部読ん
でから行けばいいのよ！」

「……………ダメダコリヤ」

鎖国までもうちょっと時間はあるはずだしこれを読んでもからでも。
そう自分へ言い訳をし、私は近くの本へと手を伸ばした。

「はあ、まったく……パチエがここまで読書狂だとはな」
「最近新しい本が買えなかったからつい……」

エヴァが溜息をつきながら私をジト目で見てくる。

まあエヴァが来るまでずっと本を読んでいたのだから仕方ないわよね。

「まあいい。それよりも二階から上は特に変わったものはなかった」
「一階も同じね」

「で、これからどうする？ 近くを通る船はあるかもしれんが次が何時なのかわからんぞ」

「そうね。船が沈んでしまったのだから次からは航路を変える可能性もあるし、あまり期待は出来ないわね」

「それだと一旦別の街に向かってそこからまた船に乗るか、ここから別の方法でジパングを目指すしかないが……」

「一番近い大陸までの距離次第では前者は厳しいわね」

「別の方法を探すしかないか……その間に追っ手が来ない事を祈るしかないな」

「……念の為、認識障害の結界を張っておくわ」

城での生活が始まって数ヶ月。

私達はジパングへの移動手段を探しつつここでの生活を送っている。

孤島だからなのか未だ私達を狙う正義の魔法使い達は現れていない。

エヴァと一緒に狙われ始めて、ここまでゆったりした生活は久々ではないだろうか。

そんなある日。

今日も書庫で移動手段を探しつつ、趣味の読書を楽しんでいるとエヴァがやってきた。

「パチエ、ジパングへ行くいい方法が見つかったぞ！」

「どんな方法？」

「これだ！」

そう言つてエヴァが私に本を見せる。

「これは……」

「この『楽しい異世界旅行』に書かれている魔法を使えばジパングへ行けるはずだ」

確かに、その本に書かれている魔法を使えば理論上、異世界や平行世界はもちろん、好きな場所へいけるようになる。

「でもその魔法、前に試したけど魔力を消費するだけで成功しなかったから怪しいものよ？」

「そうなのか？ ふむ……………」

失敗の話聞いたエヴァは何か考え始めたと思ったら急にニヤリと不気味な笑みを浮かべる。

「…………エヴァ？」

「パチエ、ちよつとした賭けをしないか？」

「賭け？」

「パチエの失敗したこの魔法を私が成功させる事ができるかどうかだ。勿論私は成功する方に賭けるぞ」

「……………いいわよ。それで何を賭けるの？」

「血……………と言いたい所だがそれだと私にしか利がないからな……………バクテイオー従者契約なんてどうだ？」

「バクテイオー従者契約……………確か魔法使いのパートナーがどうのって奴よね」

「そうだ。今回は賭けに勝った方が主で、負けた方が従者って事になるな」

「それでいいわよ。でも勝負なんてしなくても言ってくれれば普通に契約するわよ？」

「……………そうなのか？」

「ええ、アーティファクトとか言う魔法具にも興味あったし……………まあ、楽しそうだからそのままで行きましょう」

「パチエがそう言うならそれでいいか……………しかし魔法の研究なんて闇の魔法以来だから楽しみだ」

そしてニヤニヤと笑いながらエヴァが部屋を出て行った。

きつと私を従者にして扱き使ってる所でも想像しているのだろう。

エヴァが部屋を出て行って暫く経ってから、チャチャゼロが話しかけてきた。

「トコロデ、期限ヲ決メテナイガ、ヨカッタノカ？」

「……………」

「ケケケ。流石、御主人ダゼ」

「はぁ…………このままだと確実に私が従者になりそうね」

「ソノ時ハ先輩トシテ、タツプリ扱イテヤルゼ」

「それは遠慮するわ」

まあ、アーティファクトを貰えるし別に従者でも問題ないのだけど――。

何か嫌な予感がするのよね。

無事に済めばいいのだけど…………。

8ページ目 「魔法使い、賭けをする」(後書き)

ここまでお読みいただきありがとうございます。御座います。

9話目がある程度形になったので予定より早いですが8話目を投下。

とりあえずパチエのぱくちおーフラグを立ててみる。

そしてアーティファクトどうしよう…。

本つながらでデスノー…いや何でもないです。

あと気がついたらPVが11万超えておりました…。

投稿してから誤字脱字チェックしてるので500くらい自分な気がします(汗)

ゆにーくも2万5千超えていますね。

最初は恐る恐るな感じでしたがこれだけ読んでもらえてるんだなと思つとちよつと嬉しいですね。

今後も完結目指して頑張りますのでよろしくお願い致します！

？ページ目 「魔法使い、飛ばされる」(前書き)

？話目です、どうぞー。

？ページ目 「魔法使い、飛ばされる」

？ページ目「魔法使い、飛ばされる」

「お嬢様、パチュリー様、お茶の準備ができました」

何も無い所から急に現れたメイドが、音も立てずに紅茶の入った力
ツプを置いていく。

「ふふ、ありがとう咲夜」

「……ありがとう」

そして紅茶を置いたメイド——咲夜はお嬢様と呼んだ人物の後ろに
控える。

「……い、いただきます」

私は出された紅茶に口をつける。

……美味しい。どうやって淹れているのだろうか。

「さて、場も整った事だし話を聞かせてくれるかしら？」

私が紅茶を飲んで一息ついた所でお嬢様と呼ばれた女の子——レミリアが口を開く。

そして私は、此処へ来る事になった経緯を説明し始める。

それは今から数時間前の事——。

エヴァが賭けの話を持ちかけてきて数週間経ったある日。
私が書庫で本を読んでいると、離れた場所で魔力の流れを感じ取った。

「？ エヴァが挑戦してるみたいね……成功するのかしら」

ちょっと様子を見に行こうかなと立ち上がった瞬間、足元から光が溢れる。

「え……ッ!？」

何事かと足元を見れば魔法陣が現れ、底の見えない大きな穴が開く。勿論、運動神経が切れている私が咄嗟に動けるはずもなく——落ちていった。

底の見えない真つ暗な空間を落下しつつ、どうやって脱出するか考える。

その前に落下を止めて落ち着こうと思い魔法を使うが、発動させた先から術式が分解されていく。

「魔法が……打ち消されてる？」

魔法を打ち消され、落下を止められない。

困った……魔法が使えない私は読書が趣味のただの娘でしかない。

魔法が効かず、打つ手が無い為早々に脱出を諦める。

次に、こうなった原因——穴に落ちる前に現れた魔法陣について考える。

「あの魔法陣……見間違いでなければ『楽しい異世界旅行』に書かれていた魔法陣のはず」

離れた部屋でエヴァが魔法の実験をしていたが、何故私のところに魔法陣が現れたのか。

普通は術者の前の空間に穴を開けて道を開くはずなのだが……それがなぜか私の足元に現れた。

そして、考えていくうちに私はある事に気づく。

「……魔法陣の記述に誤りがあるとしたら？」

記述が違うと、本来とは違う場所に穴が開いてしまう。

私が実験した時も間違った記述により、今回と同じ現象が起きていたとしたら？

そう考えると私の部屋から椅子と本が消えていた事にも繋がる。あの時、私の部屋で穴が開き、今の私のように椅子と本がどこかへ飛ばされたのだろう。

……ただ天井に刺さっていたナイフだけはよくわからないけど。

確証はないが多分この考えで間違いないだろう。

しかし、エヴァは何処へ繋げようとしたのだろうか。

術者であるエヴァにしかわからない為、到着してみないと対処のしようがない。

流石に変な所へは繋げてはいないだろうがちょっと不安である。

暫く続いた落下は、私が激しく腰を打ち付ける事により終わりを告げた。
感触からしておそらく木の床だとは思うが……あまりの痛さに顔をしかめる。

「もう……最悪だわ」

痛みで目に涙を溜めつつ辺りを見回す。

辺りには本がぎっしりと詰まった棚がたくさん置かれており、その膨大な量に驚く。

しかし、すぐ近くで人の気配がした為、そちらへ目を向けて——私は再び驚く。

そこにはナイフを構えたメイドと、何故か顔も服も私とそっくりな女性が驚いた表情でこちらを見ていた。

「「「……………」」」

二人より先に驚きから立ち直った私は現状について考える。

空間を抜けた先に私とそっくりな人がいて、その傍らに一人のメイド、しかも場所が薄暗い書庫。

……どう考えても紅魔館です、本当にありがとうございました。

でもなんで私がもう一人いるのか……もしかして平行世界？
理論上は可能ってあったし十分にありえるわね。

でもエヴァは幻想郷を知らないはずなんだけど……エヴァ、貴女は
一体何処に繋げようとしてたの？

「咲夜？　今凄いい音がしたけど何かあったの？」

私が心の中でエヴァに問いかけていると、小柄な少女が現れた。
水色がかった青い髪に赤い瞳、ピンクのドレスに背中に見える羽。
そこに現れたのは、私が捜し求めていた吸血鬼レミリア・スカーレ
ットだった。

そしてレミリアは私と、側で驚いたまま固まっている二人を交互に
見比べてこう言う。

「……ふふ、なるほど。　ようこそ紅魔館へ……もう一人のパチュリ
ー・ノーレッジ」

その後、驚きから立ち直った私とそっくりな女性——パチュリーが
話しかけてくる。

「……貴女何者？」

「私はパチュリー・ノーレッジよ……もっとも平行世界のだけど」

「……平行世界？」

「ええ、実は「ちょっと待ちなさい」——」

今までの経緯を話そうとした所に今度はレミリアが割り込む。

「話が長くなりそうだしお茶でも飲みながらにしよう。貴女達もそれでいいわよね？」

「……お嬢様がそれで良いなら構わないわ」

そしてメイドの咲夜がお茶の用意をし、現在私が今までの経緯を説明している。

「——と、こんな所なだけで解って貰えたかしら？」

私は今までの経緯を三人に説明し、紅茶を一口飲んで一息つく。

「なるほど……つまり事故で平行世界へ来てしまったという事です

ね」

咲夜が私の頑張って伝えた説明を一言で纏めてしまった。

「……ええ。私も実際ここに来るまで本当に平行世界があるなんて思わなかったわ」

私はこの世界のパチュリーを見ながら言う。

「……その魔法について詳しく知りたいわね。どうにかならない？」

パチュリーが魔法に興味を持ったのか聞いてくる。

「魔道書があれば楽なんだけど……ここにはないのかしら？」

「本のタイトルは？」

「『楽しい異世界旅行』よ」

「ここに有ったかしら？ 小悪魔はいる？」

パチュリーが小悪魔はいるかと呼びかけ、暫くすると赤い髪に、頭に羽がついた女性が現れた。

「パチュリー様、お呼びですかー？ ってパチュリー様が増えてる

っ!？」

「……この子は？」

私とパチュリーを見て驚いている悪魔っ娘を見てパチュリーに聞く。

「私の使い魔の小悪魔よ、今は司書の真似事をさせているわ……もつとも、覚えが悪いから全部私が指示してるけど」

「そうなの？ 私もそのうち呼び出してみようかな」

「貴女はまだ呼んでなかったのね……呼ぶならもつと優秀なのをお勧めするわ」

「うう、パチュリー様酷いですー」

「そう思うならいい加減本の位置を覚えて頂戴。それと『楽しい異世界旅行』という本を探してきて」

「わかりましたー………パチュリー様、場所がわかりません」

「………有るとすれば多分54列目の棚にあるわ」

「わかりました！ すぐ取ってきますね」

そう言っつて小悪魔は本を探しに奥へと消えていった。

「……ところで、以前その魔法使って、椅子と本が無くなったとかないか？」

小悪魔が本を持ってくるのを待つ間、レミリアが聞いてくる。

「？ あるわよ……………まさか？」
「ええ。ここに流れ着いてるよ」

私はレミリアの言葉を聞いて驚いた。

確かにあの時はレミリアの所へつなげるように魔法を使ったが、平
行世界へ繋がったとは……。

「ああ、あの穴は貴女がやってたんですね」

レミリアと私の話を聞いて咲夜が言う。

詳しく聞くと、レミリアの前に二度ほど穴が開き、椅子と本が出て
きたのだとか。

最初はスキマ妖怪の仕業かと思ったらしいが、穴を良く見れば違う。
そして次の穴に突入して正体を調べるつもりだったが、三度目の穴
は天井付近に現れた為、突入を諦め咲夜がナイフを投げ込んだらし
い。

なるほど、これで天井に刺さっていたナイフの正体が分かった。

「ところで、貴女はこれからどうするのかしら？」

天井に刺さったナイフの正体に納得していると、レミリアが今後に
ついて聞いてくる。

「それなんだけど、戻る準備が整うまではここに居て構わないかしら?」

「ええ、構わないよ。むしろ暫く留まって貴女の世界の事をもっと教えて頂戴。パチエも興味あるでしょ?」

と、レミリアはパチユリーに聞く。

……呼び方が身内の前でしか使わない愛称になったのを見ると、私も身内と思ってくれているのだろうか。

「……ええ。平行世界の私はきっと私とは違った歩みをしてるはずだし詳しく聞きたいわ」

「話すのは構わないのだけど……そんなに長くは生きていないから話せる事は少ないわよ?」

「そうなの? 因みに今いくつ?」

「確か、今年で15だったはずよ」

「……」

何故か私の歳を聞いて黙り込む三人。

「……パチエ、貴女今いくつだったかしら」

「………少なくとも百は超えてるわ」

私が若すぎるのがダメなのかしら?

それにしても幻想郷の人たちも年齢って気にしてたのね、意外だわ。

でもそんなの気にしてたら月の頭脳とか神隠しの――。

「……どうした？」

レミリアが私の異変に気づいて声をかけてきた。

「い、いえ……何でもないわ。ちよつと寒気がただけよ」

「風邪か？ 咲夜、後で構わないから念のため竹林の……何て名前だったか、あの悪党面のところで薬を貰ってきて頂戴」
「わかりました」

咲夜がいなくなると同時にレミリアも席を立つ。

「さて、そろそろ寝る時間だし私は寝かせてもらつよ」

「ええ、おやすみレミィ」

「おやすみなさい」

私とパチュリーはレミリアへ挨拶をし、待つこと数分。
本を持った小悪魔が戻ってきた。

「パチュリー様、見つけてきましたー……あう」

何も無いところで躓いて転び、涙目になる小悪魔。

「……何これ可愛い」

「……あげないわよ？」

「自分で呼ぶから大丈夫よ」

「……変なのが来ないといいわね」

「本当に来そうだからそういう冗談はやめて……」

向うに帰ったら私も小悪魔を使い魔として呼び出そうと思う。
……違う子が来そうで怖いけどきつと大丈夫のはず……多分。

？ページ目 「魔法使い、飛ばされる」(後書き)

ここまでお読みいただきありがとうございます。御座います。

ふははは、簡単に日本に行かせるわけじゃないじゃないかッ！

に、日本に行った場合の話が思い浮かばなかったわけじゃないんだからなっ！！

……………嘘ですごめんなしあ！><

てか今回は推敲していく毎にグダグダになっていく……………どうみても推敲になってない件についてorz

ネタバレにならなさそうな今後の予定(セーフ?)

・ぱちえのぱくちおーのタイミング。

↓現時点では、ネギま原作始まってからの予定になります。

途中の設定見直しによっては早まるかもしれません。

それまでには納得の行くアーティファクト考えとくよ！

・紅き翼との絡みについて。

↓現時点ではスルー予定。

絡ませると後々面倒臭そうなのが主な理由。

てか関わると最後の創造主の攻撃で確実に死ぬと思うんだ(´・ω・

、;))

一応案がない事もないけど…………微妙かなあ。

栞1枚目 「吸血鬼、語る」 (前書き)

本編……ではなく、閑話です。
ちよつと未来のお話。

栞1枚目 「吸血鬼、語る」

栞1枚目「吸血鬼、語る」

ん？ どうした、ぼーや……に、神楽坂明日菜、それに他の奴らまで。

——僕、パチュリーさんについて知りたいんです！

パチエの事が知りたい？

私ではなく、本人に聞けばいいだろう。

——さつき話をしにいったんですが……読書の邪魔だって追い出されちゃいます。

……確かに読書の邪魔をするとダメだな。

まあいいだろう。

修行も根を詰め過ぎるとダメだからな。

私とパチエの馴れ初めでも話してやろう。

……最初にパチエと出会ったのは私が真祖の吸血鬼になって二百年ちよつと経った辺りだった。魔法使い達から逃げて、ある街の宿で追っ手をやり過ごしている時だ。

——ええ！？ パチユリーさんってそんなに生きてるんですか！？

違うが……まあ後で話すさ。

で、最初は追っ手かと思い捕まえたんだが、どうやら旅の途中で寄っただけだったらしくてな。

嘘はついてなさそうだし、女子供には手を出さない主義なのでその時は見逃したさ。

次に会ったのは血を吸って魔力を回復させようと別の街で獲物を引っ掛けた時だったよ。

その時、パチエにも血を分けてもらってたんだが……美味過ぎてつい吸いすぎてしまってな。

もう少し気づくのが遅かったら殺してしまうところだった。

——マスターでもミスをするんですね。

ふん……私だってミスをする時もあるさ。

……話を戻すが、そこで放置して死なれても困るし私の主義に反するからな。

近くの宿屋に連れ込んで介抱してやったわけだ。

まあ治療魔法は苦手というか殆ど使えなかったから苦労したさ。

偶々、パチエが持ってた魔道書に簡易的な治療魔法の呪文が載ってたからなんとかあったがな。

それからパチエが目を覚まして色々話をしたらチャチャゼロの名前から私の正体がバレてしまってたな。

てつきり襲ってくるか命乞いでもするかと思っただんだが……意外に冷静でな。

パチエはこれでも結構焦ってると言っていたが何かと聞けば、今後についてどうしようとか言ってきた。

目の前に悪の魔法使いたる私が居るのにそれを無視して今後についてだぞ？

最初は呆れて物も言えなかったが、その時から段々興味が沸いてきた。

私の正体を知っても恐怖するでもなく、正義の魔法使い達みたいに倒そうとするでもなく。

パチエは普通に接してきた……私に血を吸われて死に掛けたのにだ。

私の興味を引くには十分だったよ。

それからパチエと一緒に行動するようになった。

何故かパチエはジパング……日本を目指していてな。

そこを目指す為に移動していたんだが途中でやはり私を狙う魔法使い達に襲われた。

その時私と一緒にいたのが不味かったのか奴等はパチエまで狙い始めた。

それで反撃したのも不味かったんだろう。

気づいたらパチエにまで賞金がかかっていたさ。
今はどうなってるか知らないがな。

魔法使い達に狙われつつも次の街にたどり着き、日本行きの船に乗ったんだが……。

肝心の船が途中で沈んでしまった……近くにあった孤島で暫くの間生活することになった。

島で生活し始めて数ヶ月たったある日、丁度いい魔法があるのを出してな。

パチエが持っていた魔道書に書いてあった魔法で、好きな場所にゲートを開く魔法だ。

——そんな魔法が……それなら僕の父さんを探しに行く事も……。

確かに……でもアレはそんな便利な魔法じゃない。

対象が複数あった場合、どこにいけるかわからんからな。

それに私も一度試したが奴の元へはたどり着けなかった。

——そ、そんなあ。

そして、その魔法を私が再現する為に研究し、試しに使ったんだが……術式に誤りがあった。

術者の目の前にゲートが開くはずが離れた場所に開くようになっていた。

で、ゲートを開いた先がパチエの所だな……。

それに巻き込まれてパチエを別の場所に飛ばしてしまったわけだ。

——ええ！？ ど、どこに飛ばしちゃったんですか！？

最初は驚かそうと思ってパチエの所に繋がるように発動させた。

——ん？ それならパチュリーは自分が居た場所に飛ばされた事になるじゃない。

……お前にしてはやけに鋭いな、神楽坂明日菜。

確かにその通りだが……パチエは何処にも居なかったんだ。
それから私はパチエを探し回った。

——ちょっとまってエヴァちゃん、島からはどうやって脱出したの？

影を使つた転移魔法だ。
私一人ならどうともなるからな。

そして世界中を探した……魔法使い達に追われながらもな。
しかし、見つからなかったんだ。

——見つからなかったって……じゃあ今、書庫で本を読んでるパチ
ユリーはなんなのよ。

心配するな、間違いなくパチエ本人だ。

……パチエと再開したのはぼーやがここへやってくる少し前だった。

——今までパチユリーさんは何処に？

私もパチエに同じ事を言つた……そしたらパチエはこう言つたんだ。

『自分と会っていた』とな。

どうやら私がパチエの所へゲートを開けようとして、平行世界のパチエの元へ繋げてしまったらしい。

通りでこの世界を探し回っても見つからないはずさ。

で、戻ってきた本人から聞いた話だが平行世界とこちらの世界の時間の流れが違っているらしくてな。

本人は私に飛ばされてから一年も経ってないと言っていた。

こっちでは400年近くも経っているんだがな……。

——それじゃあパチユリーさんは見た目どりの年齢と言う事ですか。

まあそうなるな。

と言っても私に会った時が14歳だったはずだから……お前等の一個上になるんじゃないのか？

——まさかの先輩！？

さて、お喋りもここまでだ。

修行の続きをしる、魔法世界はそんなに甘くはないからな。

休んでる暇はないぞ！

パチエは400年掛かったがちゃんと再会できたんだ。

……貴様も生きてるのならさっさと顔を出せ、馬鹿者。^{ナギ}

栞1枚目 「吸血鬼、語る」(後書き)

ここまでお読みいただきありがとうございます。御座います。

ちよつとリアル都合忙しくて中々書けないであります。

10話も上手くまとまらないしもうちよつと時間かかりそうなので
こつといった話ささつと作って時間稼ぎ(汗)

ちよつとだけ書き方変えてみました。

会話だけじゃ誰が誰かわからんですね。

本編では戻します。

あと今月一杯忙しいのでもしかしたら次は来月になるかもしれません。
ん。

10ページ目「魔法使い、黒白に出逢う」(前書き)

10話目です。

話はそんなに進展してませんがどうぞー。

10ページ目「魔法使い、黒白に出逢う」

10ページ目「魔法使い、黒白に出逢う」

「中々面白い魔法だけど……この魔法を見るとスキマ妖怪を連想するわね」

小悪魔が持ってきた例の本を読んでパチュリーが口を開く。

「スキマ妖怪？」

「ええ。貴女は知らないでしょうけど、此処にはスキマ妖怪っていうこの魔法に似た能力を持った妖怪がいるわ」

「へえ、そのスキマ妖怪って凄いのね」

スキマ妖怪。

十中八九、八雲紫の事だろう。

因みに説明等が面倒だったので、私が転生者だというのは教えない。

その為、色々知らない振りをしている。

「確かに能力は凄いけど、咲夜曰く……色々と胡散臭いらしいわ」

「そこまで言われるとちょっと会って見たいわね」

「辞めた方がいいわよ、きっと碌な事にならないから」

その後、パチユリーが別の本を読み始めた為、私も近くの棚から一冊の本を持ってきて読む。

タイトルは『とある蛇の潜入任務』である。

内容は蛇と呼ばれる傭兵がとある事情で敵地に潜入するお話。

読んでいくと、この蛇と呼ばれる男の凄さにどこか惹きつけられるものがあつた。

魔法や近代兵器で守備された敵地を、ダンボール一つで渡り歩く姿に何か神々しいものを感じた。

読み終わって本を机に置くと、いつの間にか紅茶が置かれて居るのに気づいた。

小悪魔が入れたのか、咲夜が入れてくれたのかわからないが、それに気づかないくらい熱心に読んでいたようだ。

紅茶を堪能しながら、蛇の活躍する場面や台詞を思い出していると視線を感じたのでそちらに目をやる。

すると、何故かパチユリーがこちらをジッと見つめていた。

「な、なに？」

「……その本」

「この本？」

「気に入ってる本だから是非感想を聞かせて欲しい」

感想……か。

レミリアや咲夜達には聞いたのだろうか？

……いや、彼女達は読まなさそうだ。

「とりあえず、ダンボール一つでテロリストを倒すだなんてありえないと思ったわ」

「……そう」

「でも、こういう物語は嫌いじゃないわ。それにしても……このダンボール凄いわよね」

何が凄いつて、このダンボールを被れば魔法や、最新鋭のレーダーでも感知されないのだ。

まあ肉眼だとバレるという欠点もあるが。

「私はダンボールは偽装で本人が何かしら能力を使ってるんじゃないかと思ってるわ」

「……能力？」

「ええ。きつと蛇は『見破られない程度の能力』を持っているんじゃないかしら」

なるほど、確かにそれなら色々と納得できそうな場面もあった。

「それに続編の時だって「待って」……」

流石に続編の話をしようとしたので止めた。
まだ読んでいないのにネタバレとかダメすぎる。

「ネタバレはダメよ……」

「……あ、ごめんなさい」

「とりあえず続編も読むからちょっと待ってて」

そう言って私は続編を読み始める。

——紫もやし読書中。

「なるほど……素顔のまま敵地に潜入してるのに蛇だとバレてないから『見破られない程度の能力』か……」

「ええ。因みにそのシリーズは四作目まであるわ」

「後で読ませてもらうわね」

因みに三作目は蛇の過去編、四作目は二作目から十年後の話だった。その後、蛇についてパチュリーと話していると何やら入り口の方で大きな音がする。

「何かあったの？」

「……きっと魔理沙だと思う」

パチュリーの顔が心なしに嬉しそだったのは気のせいだろうか。

「魔理沙？」

「一応こちらの世界の事は何も知らない事になってるので聞くと――」。

「おつす、パチュリー。今日も本を借りに来た……ぜ……」

本棚の間から箒を手に持った一人の少女――魔理沙が現れた。

容姿は金髪で先の尖った黒い帽子、黒い服に白いエプロンをつけたような格好をしている。

その魔理沙が、こちらを見て話していたのだが急に動きが止まる。

「……どうしたの魔理沙？」

パチュリーがどうしたのか魔理沙に聞くと……。

「うふふふ、早く帰ってキノコ補給しなきゃ……パチュリーが二人に見えるなんて……やっぱり徹夜はダメだなあ」

急に黒い歴史を感じさせるように笑い、帰っていつてしまった。

「……帰っちゃったわね」

「……そうね」

「二人に見えるんじゃないかって実際に二人居るのにね……」

「……そうね」

「……パチュリー？」

「……」

……パチュリーの機嫌がちょっと悪くなったのは言うまでも無い。

「……寝るわ」

「じゃあ私も寝ようかしら」

「部屋は咲夜が用意してるところからそこを使って」

「わかった……あー、着替えを借りてもいいかしら？」

「ええ、こっちょ」

パチュリーの部屋へ行き、着替えを借りたので着替えるのだが――
――。

パチュリーが何かを見て驚き、物凄い目でこちらを見つめてくる。

（ジー………）

「ど、どうしたの？ 目つきがかなり怖いんだけど……」
「別に………なんで私より大きいのよ」

最後に何かぶつぶつ呟いていたが聞き取れなかった。
何て言っただろう……。

着替えていると小悪魔がやってきたのだが、着替えを見て何故か顔を赤らめていた。
その後、私とパチュリーを間違えてしまい怒られる小悪魔……相変わらず可愛い生き物だ。

夕方に目を覚まし図書館へと向かうと、既にパチュリーは起きており本を読んでいた。
その傍らには今朝突然帰っていった魔理沙と知らない女性が居る。

知らない女性は魔理沙と同じく金髪をしており、肌が白くまるで人形のような容姿をしている。
原作知識から照らし合わせて多分アリス・マーガトロイドだと予想する。

髪の色は違いが、金髪で白い肌、そして人形のような容姿にエヴァを想起しつつ三人の下へ向かう。

「あら、魔理沙。また来てたの？」

「おう、また来た……ぜ……」

「え……え？」

私が魔理沙に声をかけると返事が返ってきたが、私の姿を見た途端動きが止まる。

アリスは私の姿を見て驚き、パチュリーと私を交互に見ている。

「どうしたの魔理沙？」

「あ、あんた誰よ！？」

固まっている魔理沙に声をかけるが、返事をしたのは魔理沙ではなくアリスだった。

「誰ってパチュリー・ノーレッジよ」

「じゃあここで本を読んでは誰なのよ？」

「そっちもパチュリーよ」

「はあ！？」

「……魔理沙達が困ってるからいい加減にしたら？」

混乱する二人を見かねて先ほどまで本を読んでいたパチュリーが口を開く。

「ふふ、そうね。ごめんなさい今朝の反応とかが面白かったからつい」

「ど、どうなってるんだ？」

「彼女は正真正銘、パチュリー・ノーレッジよ。と言っても平行世界のだけど」

魔理沙の疑問にパチュリーが答える。

「平行世界？」

「そう、ちょっとした事故で別の世界の私がここに飛ばされてきたらしい」

その言葉を聞き、魔理沙がこちらをジーツと見つめる。

「……別の世界のパチュリーもこっちのパチュリーも変わらないんだな。全然見分けがつかないぜ」

「そうね……今朝は遂にキノコで頭がやられたのかと思ったけどこれなら仕方ないわね」

「……なあ、アリス……今朝の私ってそんなに酷かったのか？」

「酷かったってもんじゃないわよ……うふふふなんて笑って薄気味悪いったらなかったわ」

「なんてこった……また黒歴史が……」

凹む魔理沙をよそにアリスがこちらに話しかけて来る。

「えっと、はじめまして？ 私はアリス・マーガトロイド。こっちの凹んでるのが霧雨魔理沙ね」

「ええ、よろしく」

「ところで貴女のいた世界について知りたいのだけど」

「ああ、私も知りたいぜ」

何とか立ち直った魔理沙も会話に参加する。

「レミリアが起きたら話す予定になってるわ」

「あら、待たせてしまった見たいね……魔理沙と人形使いも来てたのか」

「邪魔してるぜ」

レミリアが来たら話す事になっているのを伝えと、タイミングよくレミリアが現れた。

そしてみんなが席に着き、こちらを見つめる。

「さて話せる事はそんなにないのだけど……何から話そうかしら」

いつの間にか咲夜が入れてくれた紅茶で口を潤し、私は口を開く。

10ページ目「魔法使い、黒白に出逢う」(後書き)

ここまでお読みいただきありがとうございます。御座います。

いやあ、仕事が忙しい上に他の方の作品を読むので忙しいです。

おまけにMk2なんてものが発売しましたし一日が24時間じゃ足りないですわ。

さて、暫くは幻想郷編が続きます。

で、ちよつとだけお力をお貸し下さい…。

パチュリーの呼び方をどうしようって話です。

パチュリーが二人居るから呼び方で困っております。

多少おかしい名前でも問題ないです。

おぜうが決めたと言う事にすれば大抵はいけるはず！

おぜう相手とかだとパチエとパチュリーでいけるんですが

愛称で呼ばない人達がいるから二人ともパチュリーになっちゃうんですよ。

いつその事、パチエリーさんって…。

名前間違えてるぞおい！って、パチエ好きの人が怒りそうですが(汗)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1046v/>

どうやら東方に・・・あれ？

2011年10月11日02時28分発行